

# 獣の柱

作 前川知大

## ■登場人物

2001年

二階堂望（ニカイドウノゾム）……市役所職員  
二階堂桜（ニカイドウサクラ）……望の妹、小説家  
山田輝夫（ヤマダテルオ）……農家、望の先輩  
藤枝次郎（フジエダジロウ）……アルバイト、望の知り合い  
佐久間一郎（サクマイチロウ）……護摩の灰  
堀田蘭（ホッタラン）……佐久間の相棒、護摩の灰  
島忠（シマタダシ）……俳優  
有馬賢一郎（アリマケンイチロウ）……新聞記者、桜の元夫  
時枝悟（トキエダサトル）……有馬の幼馴染、研究者  
益子真知子（マシコマチコ）……研究員、時枝の教え子  
遍路X／刑事X／警察官たち／新聞社で行き交う人々／研究所の職員たち／柱に魅了される群衆

2051年

山田和夫（ヤマダカズオ）……輝夫の孫、見える者  
神崎恵（カンザミメグミ）……見える者  
山田聖子（ヤマダセイコ）……和夫の母、輝夫の娘  
大道寺修（ダイドウジオサム）……山田家の召使い  
二階堂望（ニカイドウノゾム）……受肉の存在  
島忠（シマタダシ）……受肉の存在

## ■あらすじ

海と山に挟まれた小さな町・金輪町。二〇〇一年、アマチュア天文家の二階堂と山田は、近所の山に落ちた隕石の破片を拾う。その隕石は、見る者に極度の幸福感をもたらす、思考を奪い、支配する物質だった。独りで見れば我を忘れ、幸福の中で死を迎えることになる。その数日後、世界数カ所で奇妙な同時テロが発生する。二階堂と山田は、そのテロに隕石と同じ物質が使われていることを直観する。

その一年後、世界中の都市に三〇〇メートルの巨大な柱が降り注ぐ。その柱は、かの隕石と同じ物質だった。それは静寂のうちに人々を支配し、文明を破壊した。柱が視界に入る地域は居住不可能になり、都市の人々は難民化し、長い受難の時代となる。

人口密度の高い土地を狙って出現する柱。それを理解した人間は、小さな町で人口を制御しながら細々と暮らすようになる。いつしか柱は、不可視のご神体として崇められるようになっていった。

時は流れ、二〇五一年、柱の影響を受けない、解放された世代が誕生しつつあった。柱は人間に何を課し、何から解放したのか。隕石の秘密を知った二階堂兄妹と山田輝夫という個人が、柱という不条理な出来事をどう捉え、行動したのかを追っていく。

■  
1

暗転。静寂。暗闇の中、話し声が聞こえる。二階堂桜と山田輝夫の声。遠い記憶のように小さく響く。

桜　　なんで？

輝夫　…

桜　　なんでなの？

輝夫　分からないよ。

桜　　分かるうとしてない。

輝夫　考えてる。俺だって。

明転。舞台上には誰もいない。

2051年。(この年号は提示しない)

舞台袖から数人が現れる。おもむろに、まるでカーテンコールのように。二階堂望、島忠、山田和夫、神崎恵、山田聖子が登場。みな客席を意識している。落ち着きのない和夫に、聖子が何か小声で話している。神崎は手持ち無沙汰で、島に視線を送る。落ち着いたところで、島が望に促す。望は観客に話しかける。

前説のように始めるが、ここは金輪町の町役場にある多目的ホール。観客を集まった住人と見立てる。

望

こんにちは。では、始めましょうか。…始めまして。僕は今、ここにいます。でも、(口を指し)喋ってはいない。どういうことか。実は今、皆さんの脳に、直接語りかけています。(観客の反応をうかがい、笑みをこぼす)冗談だと思っただけでしょう。でも本当です。皆さんは脳に直接、語りかけられた経験がないので、脳が勝手に、補正をかけて、僕が今こうやって普通に喋っているように、見せているだけなんです。理性や常識からはみ出すことを、無理やり理性や常識の中に収まるように修正、改変、ごまかし？ 脳は、そういうことをするんです。これはもう脳の機能ですから、しようがない。そういう意味では、人間は脳の外に出ることができないとも言える。同じように、言葉もです。言葉は

僕たちを繋げるものです。文字にすることで未来にも繋がる。でも同時に、僕たちを閉じ込めるものでもある。僕はこの世界にやってきた時、大切なことをあなた達に伝えなきゃいけないと思っていた。思っていた、はずなんです。でも今はそれがよく分からない。僕はあなたたちとコミュニケーションがしたくて、やってきた。そしてコミュニケーションの手段として最も有効なものが言葉だと判断した。当然だけど、生まれた瞬間は僕だって言葉が不自由だった。だから学習したんです。でも言葉を学習していくにつれて、僕は自分が何を伝えたかったのか、分からなくなってきた。おそらく僕が伝えたかったことは、そもそも言葉で伝えることが出来ないものだったんでしょう。言葉を覚えたことで、僕の思考は言葉に閉じ込められてしまった。……僕が伝えたかったことは言葉の外にあった。でも僕はそれを知らなかった。僕は、閉じ込められた。(絶望を噛み締め、嘆息する)……正直に言います。僕は、喋っています。(観客の反応をうかがう)でも、でもね、きつとこの中の何人かは思ったはずですよ。そういうこともあるかもしれないなど。ひよっとしたら本当に、脳に直接。そう想像してしまうこともまた、不自然なことではないんです。脳にとって、あるいは言葉の効果として。

必要であれば、望以外の四人で2場(2001年)への転換をする。場が出来たところで、輝夫が出てくる。

望は上着を脱ぎ、2001年の望となる。他の四人はしばし2場を見学してから退場。

■  
2

「2001年」と提示する。

高知県。山間の町、金輪町。望の部屋。輝夫が望の帰りを待っている。桜が来てお茶を出す。

輝夫 あ、すいません。  
桜 いま車の音したから、帰ってきたと思いますよ。  
輝夫 ああ、そう。(お茶を)いただきます。

望が部屋に入って来る。

望 すいません部長。  
輝夫 ごめんね、焦らせて。  
望 いやいやいや。(鞆を置き上着を脱いで、ネクタイを緩めたりする)  
桜 え、部長さん？

輝夫 いや部長って言ってもあの、天文部の、カルチャーセンターの。  
桜 ああ。  
輝夫 上司とかじゃないんで。  
桜 (輝夫の格好を指しながら) ですよね。  
輝夫 そうそう。百姓でござえやす。  
桜 (笑い) じゃ、ごゆつくり。  
望 お茶菓子持ってきて。  
桜 はあ? 自分でやってよ。  
望 いいじゃん。

桜は部屋を出る。

輝夫 妹さん、戻ってるんだ。  
望 そうなんすよ。  
輝夫 東京だっけ?  
望 まあ。でも離婚したんで。先月。  
輝夫 マジで?  
望 なんか、どこでも仕事できるからとか言っつて、居座つてんすよ。  
輝夫 ああ、小説家だっけ。すごいよね。  
望 いや食えてないと思いますよ。でなきや戻つてこないっしょ。  
輝夫 あそう。でもあのお、だいぶ綺麗になったんじゃない。  
望 え?  
輝夫 妹さん。いやそんな俺昔知らねえけどさ。だあいぶ、ね。  
望 え、どうしたんすか、今日は?  
輝夫 ああうん、ちよつとね。  
望 はい。  
輝夫 いやちよつとつて話でもないんだけどあの、天文部にさ、珍しく若いの入った  
望 じゃない、去年。藤枝つての、覚えてる?  
輝夫 ああ次郎君。  
望 おお。あの、死んだつて。  
望 ……えマジで?  
輝夫 おお。  
望 え、いつ?  
輝夫 見つけたのは昨日。  
望 えええ……。  
望 外で話すのもあれだったからさ、待たせてもらったわ。ごめんね。  
望 いえいえ。

輝夫　なんか、絡みあった？

望　あああ――

輝夫　一応俺部長だし、なんか警察呼ばれて、軽く尋問されちゃったよ。

望　警察？

輝夫　見つかった状況が謎でさ。これ事件ですよ。

望　状況って、どういう。

輝夫は立ち上がり窓の向こうに見える丘陵を指す。

輝夫　あの山の中腹にある小屋っつーか物置ん中で死んでたらしいよ。麓に祖父ちゃん

んちがあつてさ、畑借りてるからよく行くんだ。山自体は私有地なんだけど、

俺時々侵入して山菜乱獲してるからさ、焦ったよ警察。まあその祖父ちゃん

も先週火事で燃えちまったんだけどさ。その火事もなんかあれで、祖母ちゃん

がかなりの名言残してんだよね。

望　うんとりあえず名言とかは、いいや。え次郎君、殺されたとか？

輝夫　分かんねえけど、自殺の可能性もあるみたいよ。望んどこも来んじゃねーか、

警察。

望　俺先週会ってんすよ次郎君と。

輝夫　マジで。

望　たまたま。

輝夫　それでかいね。

望　先週の月曜の夜中、隕石シャワーあったの知ってます？

輝夫　新聞にちっちゃく載ってたね。あ、そこだ。(窓の向こうの丘陵)

望　はい。

輝夫　見た？

望　見ました。音も聞こえだし、燃え尽きずに落ちたなと思って、俺拾いに行った

んです。隕石って落ちた場所の土地所有者に権利があるんですよ。だから、夜

中の内にこっそりいただこうと思って。

輝夫　好きだねえ。

望　望は懐中ライトを取り出し、山中を歩き出す。

望　山での出来事を再現しながら輝夫と話す。

望　山に入って二時間、もう直ぐ日の出です。

望　望は懐中ライトを空に向けて歩く。

輝夫　なんで地面じゃなくて上見てんの？

望　木にヒットしてたら枝が折れてるはずなんです。下を隈なく探す時間はないから。

輝夫　あああ。

望　中腹でボロい物置を見つけました。側面を見ると、かなり浅い角度で何かが衝突した跡がある。(望はライトで物置を調べる)

輝夫　ツイてるな。

望は物置の扉を開き中を見る。ゴルフボールほどの隕石があり、拾う。

望　かなり状態のいい隕石でした。(隕石をハンカチに包み、ポケットに入れる)

輝夫　次郎君が死んでたのって、ひよっとしてここ？  
じゃねえかな。

望は物置に何者かの気配を感じ身構える。藤枝次郎がいる。

次郎　二階堂さん？

望　あ、はい。え？　誰？

次郎　(ライトを自分に当て) 藤枝です。天文部の藤枝。

望　おおお、はいはい、次郎君。

次郎　はい。

望　焦ったあ。え何してんの、こんなところで。

次郎　二階堂さんこそ。

望　考えることは一緒かあ。

次郎　ははは。

望　高校生がいけないねえ、こんな時間に。

次郎　えー、公務員の方がやばくないすか。ここ私有地ですよ。

望　そうなんだよ。やばいやばい。

次郎　それに僕もう卒業してますから。

望　あそう、へえ、今何してんの。

次郎　いや普通に、仕事、ビデオ屋。

望　おお、出来たねデカいの。あそこ？

次郎　はい。

望　あそこのマーク、何か顔二つくつつけたみたいなの？　あれ何、怖いね？

次郎　そおっすか？

望　なんか不吉な感じすんだよね。

次郎　結構有名ですよあそこ。

望 あそうなの。お、いかんいかん、世間話してる場合じゃない。見つかったら面倒だよ、ボチボチ撒収したほうがいい。

次郎 そうっすね。

望 では。

次郎 収獲ありましたか？

望 駄目だね。暗いし分かんないよ。じゃ。

次郎 つす。

望は部屋に戻る。次郎は山に残る。

輝夫 そのまま、山で死んだ？

望 いえ、翌日の夜ウチに来てます。そんな時がちょっと、おかしいというか、テンションが。

輝夫 会ったのはそれが最後？

望 はい。

輝夫 なんでもまた小屋に戻ったんだ。

望 探すって言ってました。ウチに来たのも、ほんとには隕石拾ったんだろって。隠

してんじゃねーよみたいなの。

輝夫 山で会った時は普通だったんだろ？

望 なんか俺と別れた後、山で誰かに会ったらしいんですよ。

輝夫 おいおい、遊星からの物体Xか。

望 まあ形は人間だったらしいんですけど、アブダクションされたって。

輝夫 でえたあ。え、何か埋め込まれちゃった？

望 どうなんすかねえ。

輝夫 いやキテンぞキテンぞソレ。

望 ちよっと部長。死んでんすよ人が。

輝夫 おお、失敬。

望 部長はいいけど俺会ってんすからねこないだ。

ドアが開いて桜が顔を出す。

望 どうしたの？

桜 電話。警察なんだけど。

輝夫 きたよ。

桜、望、輝夫は部屋を出ていく。

山の再現シーンに戻る。

次郎が隕石を探していると、佐久間一郎が姿を現す。次郎は慌てて逃げようとする。

佐久間 何してるの、こんなところで。

次郎 あ、すいません。すぐ、出ます帰ります。(後ずさる)

佐久間 待ちなさい。質問に答えてないけど。

次郎 すいません勝手に。

佐久間 おや、日本語通じねえか？

次郎 えっと、あ、い、隕石、探しに。

佐久間 おお、あそう、俺も俺も。

次郎 え？

佐久間 探してんだよ。

次郎 ここの、山の人じゃないんですか？

佐久間 山の人ってなんだよ。山賊じゃねえぞ。

次郎 なんだ、びっくりしましたよ。ここ私有地だから見つかるはずですよ。

佐久間 そうなの？

次郎 はい。

佐久間 関係ねえよ。

次郎 ああ、そうっすよね。え、隕石見つかりました？

佐久間 細かいのね、いくつか。

次郎 マジすか、ちよっと見せてくださいよ。

佐久間 駄目え。

次郎 え？

佐久間 駄目。

次郎 いいじゃないすかちよっとくらい。

佐久間 駄目。だつて俺のだもん。

次郎 あああ。

佐久間 君は？

次郎 一つも。

佐久間 発見したら俺に見せなさい。よし探そう。

佐久間は次郎の背中を叩く。二人は地面を探しながら会話する。

次郎 ずるくないすか？ 見せてくださいよ、サンプルとして。

佐久間 ああ、この隕石は俺に届けられたんだ。俺のなの。



次郎 何言ってるんすか。(笑い) え、じゃあオジサン、あれですか、宇宙人だったりします。

佐久間 そうだ。

次郎 ははは。

佐久間 見つけたら俺に寄こしなさい。

次郎 没収っすか。ほんとはあれでしょ、日本流星研究会の人なんでしょ？

佐久間 なんだそれ。

次郎 違うんすか？

佐久間 俺はな、ただのラッパ屋だ。

次郎 ラッパって、あのラッパ？

佐久間 それ以外あるか？

次郎 トランペットとか。

佐久間 そうだよ。

次郎 へえ。ラッパ専門の、セールスマン？

佐久間 まあな。これから七本もラッパ届けないといけないから、もたもたしてらんねえんだよ。

次郎 (笑い) いいんすかこんなところで遊んでて。

佐久間 はは。

佐久間は空が明るんでいるのに気付く。

佐久間 んん、朝になっちまったか。

次郎 ですね。仕事ですか？

佐久間 そうだな。

次郎 宇宙人じゃないんすか。

佐久間 宇宙人だって仕事あるよ。

次郎 ラッパ屋？

佐久間 おお。君は？

次郎 僕はビデオ屋です。

佐久間 おおいいね。じゃあ仕事行きなさい。

次郎 どうしよつかなあ、隕石探しの方がよっぽど楽しいですよ。

佐久間 何言ってるんだよ。仕事行け。

次郎 オジサンは？

佐久間 俺はもうちよつと探すよ。

次郎 付き合いますよ。

佐久間 ありがたいけど、いいよ。だって君、見つけたらポケットに入れちゃうだろ。

次郎 モノによりますけどね。やっぱバイト休もうかな。

佐久間 いいよ。  
次郎 じゃ本当に宇宙人だって証明してくれたら、見つけた隕石は献上しますよ。  
佐久間 んん〜。

佐久間はなかなか帰ろうとしない次郎を邪魔に思う。

佐久間 よし。じゃあ、そこに座れ。

次郎 え？ なにするんすか？

佐久間 いいから。そうだな、膝をついて、教会で祈るような、そう。

次郎は膝をつき、胸の前に両手を組む。

佐久間 仕事不満か？

次郎 楽しくはないっすね。

佐久間 そうか。じゃあほんの少し、幸福にしてやろう。

佐久間は次郎の手に自分の手を重ね、そつと離す。次郎は組んだ自分の手をじつと見つめたまま動かなくなる。佐久間は立ち去る。

早朝から夕方へ変わる。次郎は力なく倒れ、体を震わせはじめる。次郎は何とも言えない幸福感に満たされ、笑いと涙がこみ上げてくる。

それを見ている望が居る。

望が次郎と最後に会った日の夜。望の部屋。

望 何されたの？

次郎 気が付いたら夕方五時。十時間以上空白なんです。

望 それはやつぱり――

次郎 アブダクション以外考えられません。

望 いやいや、体、大丈夫なの？

次郎 気が付いた時、体はずっしりとすごい疲労感で、でも同時にものすごい、幸福感。  
感。

望 幸福感？ なんで？

次郎 分かりません。でもあの人は幸福にしてやると言いました。

望 なにそれ。その十時間、ほんとに覚えてないの？

次郎 具体的な記憶はないけど、何か、光に包まれていたような。思い出そうとするだけで、幸せな気分になる。

望 おお。

次郎 まるで、母親の胎内にいるような、そういう完全な、状態ってあるでしょ？

望 いやあ分かんないけど。

次郎 分かんないかなあ。僕らは本来そういう完全な、完全に満たされた、調和？ そういうのを知ってるはずなんです本能として。あの幸福感はそういう、完全な調和、なんですよね。

望 おいおいおい、大丈夫？

次郎 信じてないでしょ。

望 いや好きだけど、そういうの。

次郎 だったら協力してください。僕たちは、人智を超えた存在と接触しようとして  
いる。

望 ……（苦笑）

次郎 残念ですよ二階堂さん。宇宙人肯定派でしたよね。ああ残念、本物を前にしたらこれだよ。よく分かりました、あれはあなたのようなつまらない大人には必要ないものです。隕石は僕が預かります。僕が責任持つてあの人に渡しますから。（手を出す）

望 だから拾ってないって。

次郎 拾ったんですよ。

望 しつこいよ。そのラップパ屋つてのにクスリでも盛られたんじゃないの。

次郎は立ち上がり、鬼気迫る目つきで部屋を見回す。望は緊張する。

次郎 お邪魔しました。

次郎は部屋を出て行く。輝夫がそれを見ている。

■ 4

望の部屋。望と輝夫の会話に戻る。警察からの電話の後。

輝夫 だあいぶやべえな。

望 その後心配で何回か電話したんですけどね。

輝夫 繋がんなかった？

望 はい。

輝夫 ラップパ屋ねえ。

望 重要参考人だろうって、警察も。

輝夫 やっぱ事故じゃないな。

望 死んでた状態聞きました？

輝夫 いや。

望 ビビりますよ。餓死。

輝夫 餓死？ いやおかしいだろ、人間一週間で餓死しないぞ。

望 ええ、でも次郎君、少なくとも丸五日、飲まず食わずだったようです。恐らく睡眠も。

輝夫 状況が分かんねえな。

望 まあ正確には餓死というか、過労死に近いって言うてました。栄養不足と極度の疲労。自殺だったとしても、相当の覚悟がないと。

輝夫 無理だろ。

望 だから何か宗教的な儀式なんじゃないかって。

輝夫 その辺は俺も探り入れられたわ。クスリは？

望 解剖の結果、薬物反応はなし。当然アブダクションの形跡もなし。

輝夫 うーむ。

桜がお茶と茶菓子を持って入って来る。

桜 なんか怖いですね。田舎も安心できないわ。どうぞ。

輝夫 あすいません。

桜 ちよつと前、映画のロケで俳優が一人、行方不明になったニュース。あれも近いでしょ。

輝夫 ありましたね。上流の方だ。

望 島忠だっけ。

桜 最近人気あったのになあ。

望 まだ見つかってないの？

桜 うん。

輝夫 やべえな高知県。

桜 その山、こないだ火事もありましたよね。

輝夫 ああそれウチの祖父ちゃんなんですよ。

桜 そうなんですか。お怪我は？

輝夫 大丈夫でした。家は全焼だったけど。

桜 まあ怪我がね、無いだけでも。

望 隕石、見ます？

輝夫は返事をせず、考えている。望は隕石を入れた箱を持ってくる。

望 どうしたの？

輝夫 いや、うん、祖母ちゃんのコメント思い出してた。祖父ちゃんと祖母ちゃん、

消防車が水撒いてんの呆然と見てたらしいんだけど、五十年住んだ家だよ、切ないじゃない。でも祖母ちゃん、こう言ったんだよ。「変な話だけど、あの時、

幸せだったのよ」。  
家燃えてるのにな？

望 火事いつ？

輝夫 火曜。

望 隕石の翌日だ。

輝夫 どうこの幸福繋がり。

望 火事におかしいところは？

輝夫 出火は昼時でガスコンロ、鍋の空焚き。

望 普通だね。

輝夫 そうでもない。祖父ちゃんたち庭にいたのに、消防車が来るまで気が付かなか  
ったって言うんだよ。

望 いやいや、おかしいでしょ。

輝夫 通報も近所の人がしてて、救助されて初めて、うわ燃えてる、みたいな。

望 えなにそれ。何してたの？

輝夫 草取りだつて。

望 どんだけ集中してんだよ。

輝夫 まあさっきのコメントもそうだし、親父なんかはポケちまったか、なんて言う  
んだけど。なんだろうなこれ。

望 うん。いやなんかあるよそれ。

輝夫 隕石。

望は隕石の箱を渡す。輝夫は隕石を手取る。

輝夫 どう思う？ 隕石と繋げて考えるべきか。

望 繋げちゃいますよね。

輝夫 ラッパ屋宇宙人説か。

望 いやあ。

輝夫 警察とは一線を描くためにも、俺たちはあえて宇宙人説でせめてみるか。

望 不謹慎な気もしますが。

輝夫 ロマンを取ろうじゃないか、我々は。

桜 不謹慎だと思えますよ。

輝夫 いや大真面目です。

望 ラッパ七本って何のことでしょうね。

輝夫 そういうバンドあんのかね。

桜 七人のラッパ吹き、七つのラッパ。聖書だよ。

輝夫 聖書？

桜 うん。たしかそう。聖書ある？

望 ああ多分。

桜 出して。

望 後でいいだろ。

輝夫 ま、とにかく、我々も独自に捜査を進めよう。こつちには隕石という手があるんだ。

桜 見せて。

桜は隕石を手にとつて見る。

桜 意外とつるつとしてるのね。

望 それは溶融被殻っていつて、膜みたいなもんだよ。大気との摩擦で表面が溶けて、固まったの。

桜 へえ。チヨコのコーティングみたいだね。

望 そうだね。

桜 むいてみる？

望 やめろよ。

望は桜から隕石を取ろうとする。桜は悪ふざけして渡さない。望が無理に取ろうとすると桜は隕石を落としてしまう。慌てて拾う望。

望 何やってんの？ あ！ ああああ。(被殻にヒビが入っている)

輝夫 割れた？

望 被殻にヒビ入っちゃったじゃんよお。ふざけんなよお。うわあ。

割れた被殻の一部が剥がれる。望は被殻の下を見たまま動かなくなる。

桜 ごめん。そんな、貴重なものだった？

輝夫 どうなんすかね。

桜 ごめんね。望？

望は反応しない。

桜 すいませんでした。ちよつと、ごめんね。謝ってるでしょ。

桜は望を押し。その拍子に隕石から視線が外れ、望は我に返る。

桜 ちよつと見せて。

■ 5

望  
いいよ。(拒否)

望は隕石をハンカチで包む。

望　ていうか、なに？　謝れよ。  
桜　謝ったでしょ。  
望　謝ってねえよ。  
桜　謝ったって。  
望　謝ってねえだろ。

望は桜を押す。

桜　あ、あ、ちよつと何、やめて。  
望　ふざけんじゃねえよ。  
桜　え、ちよ、大人気なくない？  
望　うるせえんだよ、この、出戻りが。  
桜　はあ？　ちっちゃええこと言ってるじゃねーよ。だから彼女できないんだよ。  
望　出戻りゲラウト！

桜は部屋を出て行く。

望　最悪ですよ。すげえ状態良かったのにこの隕石。  
輝夫　謝ってたよ。  
望　え？  
輝夫　妹、謝ってたよ。  
望　ああもういいっすよ。  
輝夫　じゃあ、まあ、俺行くわ。明日山調べてみよう。  
望　はい。  
輝夫　昼過ぎ、迎えに来るよ。

輝夫も部屋を出る。望は自分の中に残った感覚に違和感を感じている。望は手に持った隕石のハンカチを開く。被殻の剥がれた隕石を見ると、再び意識を奪われる。

高知の国道。お遍路さんが歩いてくる。  
向いからはスーツケースを引いた佐久間が歩いてくる。

佐久間 あ、ご苦労さまです。

遍路X こんにちはー。

佐久間 (指にかけた車のキーに気づき) あ、車ですか？

遍路X ええ。

佐久間 空港方面行きます？

遍路X すいません、次の寺逆方向なんで。

佐久間 あああ。

遍路X バスがありますよ、たしか。

佐久間 一時間待ちなんだわ。

遍路X そつかあ。

佐久間 参ったなあ。

遍路X うーん。

佐久間 ああいいよ、うん、ありがと。

遍路X すいません。

佐久間 万華鏡見る？

遍路X え？

佐久間 万華鏡。(万華鏡を出す) これ珍しいのよ。一本どうかと思つて。

遍路X いやいいすよ。

佐久間 見るだけでも。すげえいいから。(万華鏡を振るとカラカラと音がする)

遍路X はあ。

遍路Xは万華鏡を受け取り、見る。万華鏡の中には隕石の破片が入っている。遍路Xは目を奪われる。佐久間はその間に車のキーを奪い、万華鏡を取る。遍路Xは幸福感の余韻に襲われている。

佐久間 車、何乗ってるの？

遍路X え？ あ、ああ……ポルシェです、あそこの白いの。

佐久間 おお、いいねえ。

遍路X あれ？ あれやばい。やばいアレがない。キーがない。

遍路Xはポケットを探すが見当たらない。来た方面を見る。

遍路X うわあ、やつちやつたかあ。

佐久間 お寺さんじゃねーか。

遍路X あはい、あ、じゃ、すいません。

佐久間 おお、気いつけて。



遍路X はい。(遍路Xは来た方に戻っていく)  
佐久間 じゃあね。地面よく見ろお。  
遍路X なんだよもお。

佐久間はキーを手にとって見る。

佐久間 ポルシェで遍路とか、なんか許せねえなあ。

佐久間は遍路Xの車の方(来た方)に戻っていく。

■  
6

翌日。望はそのまま動けず一晩明かす。ドアの向こうで桜の音がする。

桜 起きなくていいのお？ ご飯は？ 部長さん来るんでしょ。

望は動かない。

桜 入るよお。(入って来る)起きてんなら返事くらいしてよ。

桜は尿の臭いに気付き、顔をしかめる。

桜 なに、この臭い？ (望に寄る)え、嘘でしょ、もらした？

桜は望の体をゆるする。望は膝から崩れ、力なく笑い始める。隕石はハンカチごと握り締めたまま。

桜 望？

くくく……あはは……おとおお。

どうしたの？

望 分かんねえ(笑)ぜんぜん分かんねえ。

ただ笑う望に、桜は動揺する。望は疲労感で体が動かない。

隕石は見た者を完全に集中状態にして引きつけ、肉体の限界まで見続けることになる。見ている間は忘我の幸福感で、その間の記憶は無く、時間感覚も失う。解放された後は、圧倒的な幸福感が残り、肯定的な気分になる。この気分抵抗することは難しい。

時間経過。桜は退場し、輝夫が出てきて、心配そうに望を見ている。

輝夫 失禁したらしいね。

望 記憶ないんです、昨日部長が帰ってから。

輝夫 丸十時間か。

望 次郎君と一緒にです。

輝夫 アブダクション。

望 誘拐はされてません。床に染み込んだ小便が証明してます。

輝夫 例の、幸福感は？

望 思い出しただけでも、なんか。

輝夫 いい？ そんないいの？

望 不安も悩みも、ぶっとんじゃう感じで。

輝夫 おおお。

望は立ち上がり、隕石の箱を取りに行く。体中が痛い。

望 いててて。

輝夫 体どうなの？

望 なんか、関節が固まった感じで。多分一晚中立ちっぱだったんでしょね。よ

いしょ。(箱を取る)

輝夫 やっぱコイツ？

望 しかないと思うんですよね。見てみてください。

輝夫 大丈夫？ だって、なんかほら、謎の放射線が出てる可能性もあるわけだろ、

幸せ光線がさ。ガイガーカウンターないの？

望 ありませんよ。びびってんすか。

輝夫 びびってないよ。

望は箱を開けて輝夫に見せる。輝夫は自分で触ろうとはしない。

輝夫 こうして見ると、ただの石ころだな。何かしたの？

望 いや。

輝夫 割ろうとしたとか。

望 なにも。

輝夫 殻の、被殻の剥がれた場所はどんな感じ？

望 ああそうっすね。

望は隕石をひっくり返す。被殻の下を見ると意識を奪われる。

輝夫  
どんな感じ？

望は反応しない。

輝夫  
おい。……おい。(望を押す)

望  
え？

輝夫  
どうした？

望  
何が？

輝夫  
ぼーっとして。

望  
何が？(笑顔)

輝夫  
何がじゃなくて。どうなの、被殻の下は？

望  
待ってまだ見てない。

輝夫  
見ただろ。

望  
見てないって。(笑顔)

輝夫  
見てたって。

望  
見てないっての。(声が嬉しそう)

輝夫  
見てただろじっくり、ていうか何で薄ら笑いなんだよ。

望  
ええ？

輝夫  
気持ちわりいな。

望は自分の顔を触る。

望  
ぼーっとしてました？ 俺、今。

輝夫  
うん。昨日もあったよ。どうした。

望  
おおお、やっぱこれだよ。

輝夫  
え、今キテたの、マジで？ ちよ見せて。

望は箱を輝夫に渡す。輝夫は隕石を見て意識を奪われる。

望  
どうですか？

輝夫は反応しない。

望  
部長？ ……部長。マジか、ちよ部長！ (箱を閉じる)

輝夫  
なんだよ。(望を見る)

望  
何してんの。

輝夫  
いや今見るから、落ち着けよ。

望 いやいや、違う。

輝夫 何が。

望 もう見たた。

輝夫 なに。

望 もう見たた。

輝夫 え？

望 部長もう見たた。隕石見たた。

輝夫 ？ どういうこと？

望 んんん、まあいいや、もう一度見て。

輝夫 いや見るよ。

輝夫は再び隕石を見て、意識を奪われる。

望 部長……。部長お……。(反応なし)。やっぱりそうだ。部長この石やっぱ。

望は喋りながら輝夫の肩越しに箱をのぞく。そのまま意識を奪われる。

少しして桜がお茶と菓子を持って入ってくる。脇には夕刊を挟んでいる。

桜 動いて大丈夫なの？ 一応医者行った方がいいんじゃない。……また隕石見てえ、大丈夫？ 何か専門のさ、調べてもらった方がいいんじゃない。実際未知のウイルスとかの可能性もあるわけでしょ、隕石って。

輝夫と望は反応無し。

桜 見すぎじゃない？ ……えまた？ 望？

桜は望の腕を引く。

望 お、桜、びっくりしたあ。

桜 びっくりしたじゃなくて。

望 何が。

桜 今また固まったよ。

望 マジで？

望は動かない輝夫を見る。桜も見る。

望 俺も、こうなったの？

望 桜  
うん。なんなの？  
分かんない。

望は座る。幸福感を噛み締める。

望 桜  
どうした？  
ちよつと気分が。  
気分悪いの？  
いや、怖いくらい、気分がいい。  
は？  
副作用だよ。

望は立ち上がり、輝夫の前に立ち、箱の蓋をそつと閉める。

輝夫  
何で閉めた。  
もう充分見たでしょ。  
見てねえよ。  
二、三分見てましたよ。  
いつ？  
今。  
へえ。

輝夫はこみ上げてくる幸福感を感じる。望は箱を取り、輝夫を観察する。

望 輝夫  
今、どんな気分ですか？  
え、うん。  
気分よくありません？  
おお、まあね。(笑顔)  
でしょ？  
おほほ……これか……。  
宇宙から来た、幸福ですよ。  
くくく……(喜びを抑える)なんか、理由もなく気持ちいいのって、照れるな。  
どうなったの俺？  
(輝夫に)実演しましょう。(桜に)桜、桜も見て。  
いいよ。(拒否)  
大丈夫だから。  
やだやだ。

望 お願い。  
桜 えどうなるの？  
望 それを確かめるの。大丈夫だから。協力して。  
桜 えええ。  
望 その前に桜、今何時？  
桜 (腕時計を見る) 五時、五分前？  
望 正確に。  
桜 四時五十六分。  
望 覚えといてよ。はいどうぞ。

望は箱を開いて桜に渡す。桜は箱を受け取り、見る。立ったまま意識を奪われる。望は桜が動かないのを確認し、輝夫を見る。  
輝夫は桜に近付こうとするが、それを止める望。

望 こうなっていました。部長も。  
輝夫 望もな。  
望 どうです、この幸せそうな顔。  
輝夫 いいね、まるで赤子に微笑む母親、聖母マリアのようじゃないか。美しいよ。俺もこんな顔を。  
望 部長はエロ本見てるみたいな顔でした。  
輝夫 君も似たようなもんだ。  
望 隕石を視界から遮るか、外からの刺激じゃないと目を逸らせないみたいですね。  
輝夫 じゃあこのまま放っておいたら、あれか、失禁脱糞か。  
望 ですね。  
輝夫 見てみたい気もするが。  
望 勘弁してくださいよ。  
輝夫 すごいなこれ。  
望 かなりすごいですよ。  
輝夫 気兼ねなく女子をガン見できる。  
望 ちっちゃええなあ。  
輝夫 桜ちゃん、結婚してください。  
望 部長(笑)、身内身内、もう。

望は桜の持つ箱の蓋を閉じて奪う。桜は幸福感に戸惑う。

望 桜  
望 どお、気分は？  
桜 え？

望 気分良くない？

桜 あああ、何これ。

望 時計見て。何時？

桜 五時、一分。あれ？

望 その五分、どこいった？

桜 ええ、なんで？

望 ね、部長。隕石に目を奪われてる間、記憶がないんだよ。ただ、幸福感だけが残される。だから被殻の下を見ても忘れてる。

輝夫 つまり、確実に見てるのに、絶対に見ることが出来ない。

輝夫は箱を開けて見る。幸福感に意識を奪われる。

望 ごめん桜。これ、やばいわ。

桜 はは、でも、すごいね、幸福になる石なんて。

望 危ないよ。

二人は動かない輝夫を見る。望は輝夫の手元にある箱を閉める。

望 どうすんですか、放つとかれたら。

輝夫 おおお、何だこれテンション上がるわあ。

望 部長。

輝夫 宇宙人最高お。

望 部長。次郎君多分これで死んでんですよ。

輝夫 分かってるよ。

望 ひよっとしたらあの物置にまだ。

輝夫 祖父ちゃんちの庭にも転がってるかもな。どうする？ 回収しに行くか。

望 チームで行かないとミイラ取りがミイラになりますよ。

輝夫 おお、俺もそんなシュールな死に方はしたくねえ。宇宙人恐るべしだな、これはある意味最強の武器だぞ。これ装備してたら座頭市以外に負ける気がしねえ。

輝夫は陽気に喋りながら菓子を食べる。桜も笑っている。

輝夫 うはは。歌舞伎揚げがいつもの倍美味え、これ麻薬だな。

望は、桜と輝夫の気分が不自然に高揚していることに何となく不安になる。

桜 ねえ。どうするの、それ。

望 ……警察？  
輝夫 馬鹿お前。  
望 じゃどうすんの？  
輝夫 いや、分かんらんけど。でも警察持ってたたら、押収されて、後は蚊帳の外だぞ。  
望 しょうがないよ。事件なんだから。  
輝夫 こんなチャンス無いよ。  
望 え？  
輝夫 『未知との遭遇』を思い出せよ。最後まで食らいついてた主人公を。こいつは  
きつと俺たちを、どこかに連れてく。会えるかもしれない。  
……  
望 これは特別だ。珍しい石ってレベルじゃない。  
輝夫 でも次郎君が死んだのは確実にこれです。それに宇宙人なんて関係無くて、単  
にそういう効果のある隕石ってだけかもしれないし、その可能性の方が高い。  
輝夫 つまんねえ奴だな。  
望 部長、面白がってますね。  
輝夫 面白いもの。  
望 これで遊びたいんでしょ。  
輝夫 遊びたいさ。  
望 部長。  
輝夫 (桜に) どう思います？  
桜 ー難しいですね。  
輝夫 難しいとは？  
桜 確かにこのまま警察に渡すのは、つまらない。  
輝夫 さすが。  
望 おい。  
桜 いや別に遊びたいとかじゃなくて、だってこんなことって、ある？ 普通じゃ  
ないよね。なんか、なんかあるんじゃないかと思つて。  
望 なんかつて？  
桜 分かんないけど。なんか…。部長さんが言うように、警察に渡したら、私達  
は蚊帳の外。知りたいじゃない、なんで、こんなものが存在するのか。  
輝夫 その通り。  
桜 これを手放すつてことは、この物語から降りるつてことだから。  
輝夫 いい事言うね。そう、俺たちはこいつと出会う運命だったんだよ。  
望 人が死んでんすよ。  
……  
輝夫 ……  
望 ……そうだね。ごめん。  
望 次郎君はラッパ屋に会ったから消されたんです。あの時俺が隕石隠さなきゃ…



…。  
輝夫 望のせいじゃないよ。

望は次郎を山に残したことを後悔する。場の熱は冷め、間ができたので、桜はなんと無しに夕刊を手にとって広げる。

桜 ああ、もう夕刊にも載ってる。

輝夫 何が？

桜 テレビ見てないんですか？ 今日のお昼、渋谷で。

輝夫 ああなんかやってたね。

輝夫は新聞を受け取り、見る。

輝夫 (読む) 渋谷駅前大混乱。死傷者多数……。なにこれ。

桜 テレビずっとそれですよ。でもまだよく分かってないみたいで。

輝夫 上げえな。

望 通り魔事件？

輝夫 いや、(読む) 駅前の交差点で通行人が立ち往生、そこに車が、車が突っ込んでらしい。何台も。(読む) 暴走する車は後を絶たず、玉突き状態に……。

輝夫は記事の写真に違和感を感じ、見入る。

望 部長。警察行く前に、こっちで分かっていることまとめましょうか。

輝夫 うん。ちょこれ、なんか、すごいよ。

輝夫は望に新聞を見せる。望は受け取り、見る。

望 え、これみんな轢かれて——うわっ、車の下に人いない？ えええ……。

桜 なんか、怖いね。

輝夫 うん。なんだろうね、これ。

間。

望 部長、この写真、おかしくないですか？

輝夫 おかしい。

望 誰も逃げてませんよね。

輝夫 うん。救急車もきてるし、時間経ってるはずなのにな。

望 しかもこの人の群れ、みんな何かを見てるんですよ。  
輝夫 そうなんだよ。

桜は二人の空気が変わったのを感じる。

桜 ……え、なに？

望 いや。これって、ねえ。

輝夫 俺もそう思った。

望 ですよね。

桜 ええ？

輝夫 多分これフリーズしてんじゃねえかな。

望 隕石と、同じ状況ってこと。

桜 ええ？

望 わかんないけど。

輝夫 こう、なるんだな。

望 ……ま、ま、そうだとして。

輝夫 うん、隕石はどこにある？

望 無いですね。それにこれだけの人が同時に見れる大きさって。

輝夫 だよなあ。

望 この辺ですよね、人の視線というか、向き。

輝夫 そうだね。この街頭ビジョン見てるだけなのか？

望 この状況で街頭ビジョン見ます？

桜 街頭ビジョンの下の黒い看板、これ薬局の看板だったと思うんだけど。

輝夫 どれ？

桜 これこれ。

輝夫 ああ。

桜 なんか変。

望 あ。

輝夫 ん？

望 うわ。

輝夫 え？

望 その黒い看板。

桜 あ。

輝夫 え？

望 その看板よく見て。

輝夫 え？

望 天使、天使。黒地に金の天使。

輝夫 ええ。あ、あ、あ、ラッパ。ラッパラッパ！  
桜 ラッパ。

輝夫 ラッパ持つてる、この天使。

望 しかも、七人。

輝夫 おおお。

望 うわあ。

輝夫 ちよちよちよ隕石って何色？ 被殻の下。

望 だから見えないんですよ。記憶に残らないんだから。

輝夫 こうやって写真撮れば見えるんじゃないか？ デジカメ！

望 おおお。(デジカメを持つてくる)

輝夫 おいおい、金色だったらあれだぞ、こえーぞおい。

輝夫はカメラを受け取り、準備する。

桜 天使だった。ねえ。

望 え？

桜 七人のラッパ吹きって、天使だった。

望 それ(新聞の看板)？ 分かってるよ。

桜 違う違う、聖書に載ってたラッパ吹きって天使だった。ラッパを吹く七人の天使。

望 聖書？

桜 確か最後のほう。聖書出して。早く。

望 自分で探してよ。

桜は本棚を探し、聖書を見つける。ページをめくり、ヨハネの黙示録にラッパを吹く七人の天使の記述を発見する。

輝夫と望は協力して、隕石を直接見ないようにしながら撮影する。

輝夫 (カメラの液晶を見て) 黒だ。隕石は墨みたいな、真っ黒だ。金じゃない。

望 もデジカメの液晶を確認する。

望 てことはこの看板の黒地じゃないの。粉にして吹きつけたのかも。

輝夫 そうだよ。これ絶対そうだよ。

望 なんて、誰がこんなこと……。

桜 望、部長、これ、テロかも。聖書をネタにしたテロかも。書いてあるよ。

輝夫 え？

桜

(読む) ヨハネの黙示録第八章、ラツパを持った天使が降りてくる。一人目の天使がラツパを吹くと、ヒヨウや火を降らし、地上の三分の一を焼き払う……。二人目の天使がラツパを吹くと、海の三分の一が消える。三人目の天使がラツパを吹くと――

輝夫 やっぱ、七人いるんだ？

桜 いますね。

輝夫 ……誰か知らないが、洒落たことやるね。

望 やりすぎでしょ。

輝夫 これは、宇宙人来たか。

望 ていうか、神？

輝夫 おいおい。

間。

輝夫 さて。えっと、どうする？

望 うん。

輝夫 あの、ひよっとしたら、ひよっとしたらね、その看板が原因だって知ってるの、俺たちだけかも知れんよ、この四国の、高知の、ド田舎の。

望 ええ。

輝夫 え、なにこれ。救っちゃう？ 世界。

望 やっべえ。

輝夫 やべえよ。……どうする？

望 どうしましょう。

輝夫 そりやお前、報告しなきゃならんだろ。

望 どこに？

輝夫 国防総省。

望 防衛省ね。うわこれ、地元の警察とかじゃ、ないですよね。

輝夫 本店クラスだろうねこれは。

望 やっぱ東京ですか。

輝夫 東京か、まあ、だるうな。

望 行ったことあります？

輝夫 はるか昔な。

望 ……部長。明日からの予定は？

輝夫 小松菜の出荷、それと、田植えが始まる。

望 大事な時期ですね。

輝夫 君は？

望 午前中は役所の窓口業務、午後は老人ホームの視察。

輝夫 んー実際厳しいか。  
望 とりあえずその交番に。

輝夫 そうだな、これはもう、しょうがない。

桜 ちよつと待つて。これもし、地元の警察で情報が止まったらどうするの？ こ  
こまで理解してるの、本当に私たちだけだと思っ。東京に行くべき。

輝夫・望 んんん。

桜 なに？ なに急にビビってんの？

望 いやいや、そうは言っても急に仕事休めないから。

桜 いや仕事とかそういうレベル超えてるでしょ。(輝夫に) 東京に伝手はあるん  
です。元ダンナは新聞記者だし、出版社とか、いろいろ。

輝夫 ……正直あの人混みが苦手で。

桜 嘘でしょ！

輝夫 いやちよつと待つて、ちよつと待つて！ スケールの広がり気持ちは追いつ  
いてない。

望 スケジュールがなあ……

桜 もういい、これは私が預かる。

桜は隕石の箱を手取る。輝夫と望は思わず箱をつかむ。

三人で箱をつかんだ状態。テレビの音声が聞こえる。暗転。

T V

——続報が入りました。本日渋谷で発生した事件と同様の事件が、世界各地で  
発生していることが分かりました。現在確認されているのは、東京を含む七都  
市、いずれも中心部の繁華街で、往来の多い時間帯で発生しています。上海の  
映像です——

T V ニュースの音声は、混乱する雑踏へ変わり、途切れる。

■  
7

一週間後。高知市のアパートの一室。

佐久間一郎と堀田蘭がT Vを見ている。そこに警察の一行が踏み込む。

刑事Xと、他に制服警官が数人いる。

T V

——引き続き、先週の渋谷駅前交差点での死傷事件についてお伝えします。警  
察の発表によりますと、暴走した車の運転者に、薬物反応のあったケースは認  
められなかったということです。番組では、当日交差点に居合わせた方々にイ  
ンタビューをすることができました。インタビューでは、興味深い事実が浮き  
彫りになっています——(音声の途中で警察が入ってくる)

刑事X どうぞ、そのままです。佐久間一郎さんと、堀田蘭さんですね。

佐久間と蘭は顔を見合わせ、座る。

刑事X さて。ご存知ですよ、一週間前の事件。世界七箇所同時多発テロ。大変な事件です。ね、もう大忙し。

蘭 お疲れ様です。

刑事X 渋谷橋本ビルの二階壁面の広告スペース、一週間の契約で借りましたよね？

佐久間 私が？

刑事X あなたが。株式会社ヒツポクラテスとかいう存在しない会社名義で。

佐久間と蘭は笑いをこぼす。

刑事X 広告は事件の翌日に撤去されています。記録映像で見る限り、黒い看板、あれ、なんですか？

佐久間 自分も人に頼まれて借りただけなんです、詳しくは。

蘭 え、テロと関係あるんですか？

刑事X さあ。ただ事件の前後で動きのあった要素の一つですから。あれなんですか？何かサイン？ メッセージかな。

蘭 見てないんで、すみません。

刑事X あのスペース、一週間で250万円。なんで二日で撤去したんですか？

佐久間 ちよつと自分には、図りかねます。

刑事X ……まいいや。あの、お二人とも、詐欺と窃盗で前科ありますね。不起訴になってますが横領で逮捕もされている。それと、二件の行方不明事件の関係者としても名前があがっています。どれも一人暮らしの老人を相手にしたもののばかり。材料は揃ってるんだけど、この件について話してくれるなら考えますよ。

佐久間と蘭は刑事Xの意図を理解する。

蘭 あの、ウチらが国際テロ組織のメンバーに見える？

刑事X 見えないね。

佐久間 ま、信じるかどうかはあんた次第。俺たちは単に、歯車だよ。

佐久間は語り始める。

佐久間 一ヶ月ほど前のことだ。俺たちは高知の金輪町の更に山奥、年寄りばかりの限

界集落を訪ねた。

刑事X なぜだ？

佐久間 そこは今スルーしてくれ。俺たちのお世話が必要なお年寄りがないかとりサーチしてると、奇妙な人物が浮上してきた。一人の若者だ。

刑事X ちよつと待てその、お世話ってなんだ？

佐久間 もちろん財産の整理と墓場までの道案内だ。

刑事X お前ら余罪に満ち満ちてるな。

佐久間 取引きすんだろ。まあ聞け。その若者つてのが変わってる。集落に突然現れ、老人の世話をするようになった。それも棺桶に片足突っ込んだ高齢者や持病に苦しむジジババを、幸せにするらしい。

刑事X 幸せ。

佐久間 こんなクソ山奥で、こつそりキリストがボランテニアしてやがった。

ここから過去の再現になる。刑事達はそれを見る。  
蘭は遠くから歩いてくる島忠を見つける。

蘭 ちよつとあんた、あんた。

佐久間 え？

蘭 あれじゃないの？ 噂の。

佐久間 どれ？

蘭 あれよ。

佐久間 ジーザス。

島が通りかかる。普通の青年。

佐久間 こんにちは。

島 こんにちは。

佐久間 あー、キミ、なに？

島 どういう意味ですか？

佐久間 だから、キミみたいな子がこんなところで何してんの？

島 存在しています。

佐久間 うん、そうだね。分かるよ。俺も、そうだよ。(蘭に)だよね？

蘭 大丈夫、存在してる。(島に)あの、島、忠だよね？ 俳優の島忠。

佐久間 何言ってるの？

蘭 いやほんとに。先月鏡川の上流で行方不明になった、島忠。

佐久間 え誰それ？

蘭 結構有名よ。ニュースでさんざんやってたでしょ。映画のロケで行方不明にな

ったの。

佐久間 あー、え？

蘭 島忠だよね？

島 ええ、島忠です。

蘭 ほら！

佐久間 ウソつけこの野郎。

蘭 いや絶対そうだから、声もそうだし。本人ですよね？

島 私は島忠で間違いありません。

蘭 ほら！

佐久間 いや言い方が――

蘭 ちよちよちよ、え、何してんですか、こんなところで。探してますよ。結構な、あれですよ、大事になってますけど、いいんですか？ こんなとこウロウロしてて。

島 いいんです。

蘭 えええ……

佐久間 (笑い) なんだお前。

島 島忠です。

佐久間 知らねえよ。あのさ、帰った方がいいんじゃない？

島 帰りません。

蘭 ここで何してるの？

島 お年寄りから、色んなことを教わっています。お年寄りはとても物知りですから。

蘭 まあ、そうね。

佐久間 なあ、幸せにするってなんだ？

島 痛みを抱えている人が沢山います。生活や、存在することに苦しんでいる。その苦痛を和らげます。

佐久間 楽にするってこと？

島 ええ。

佐久間 それは、引導を渡すって意味？

島 引導？

佐久間 殺すってことだよ。

島 違います。幸せにするだけです。

佐久間 どうやって？

島 味わいますか？ (と詰め寄る)

佐久間 いいいいいい。

佐久間と蘭は思わず後ずさる。



蘭 あのと、本当に島忠？  
島 はい。  
蘭 なにか証明できるものは？

島は財布を差し出す。蘭は受け取り、中から免許証を出して見る。

蘭 本名なんだね。(佐久間も見る。蘭は財布を返す) ありがとう。  
佐久間 もういいよ。  
島 何がですか？  
佐久間 じゃあな。  
島 さようなら。

島は歩き出す。

佐久間 (頭を指し) バグってる。撤回しよう、巻き込まれたら面倒だ。  
蘭 待って。使い道はある。住人の信頼もあるようだし。  
佐久間 関わらない方がいいって。  
蘭 島くん！

島は振り返る。舞台袖中でも構わない。

蘭 何かお手伝いできることある？

再現はここまで。島は退場。

刑事X あのと、島忠？  
佐久間 ああ。  
佐久間 いいように使おうと思っていたら、使われたのは俺たちだった。  
蘭 彼には不思議な力があって、逆らうことは出来なかった。  
刑事X じゃあ、あの看板はその男の指示で？  
佐久間 そう。

刑事X ……不思議な力って？  
蘭 幸せにする力よ。  
刑事X どこまで本当なの？  
蘭 全部ですよ。

刑事X ふ〜(ため息)。……なに、あんたらみたいなのでも、幸せになりたいかと思

うんだ。

蘭 当たり前じゃないですか。

刑事X で、その島くんはどこにいるの？

佐久間 さあな。

刑事X 参ったね。島くん本人に話を聞くまでは、あんたら自由にできねえな。

佐久間 なんてだよ。

刑事X そりやそうだろう。

佐久間 ほんとに知らねえんだ。

蘭 もう何日も会ってないの。

刑事X 続きは署でやろうや。

佐久間 ちよつと待ってくれよ。

蘭 大体どこに住んでるかも知らないし。

佐久間 あの事件がなんなのかなんて、俺たちだって分かんねえんだ――

警察官は佐久間たちを囲もうとする。

そこに島忠が入ってくる。皆、島を見ると心を奪われ、動かなくなる。隕石と同じ効果が発生している。

島が動くと、視界から島が外れた者は開放されるが、再び見てしまい同じことになる。

島は佐久間と蘭の視界を手で塞ぐ。

蘭 え？

佐久間 なんだ？

島 そのまま。僕です。

佐久間 ああ、あんたか。

蘭 来てくれたんだ。

島 離しますよ。

島は手を離す。佐久間と蘭は島を見ないように目を手で覆う。

島 この人達は？

佐久間 警察だ。

蘭 悪い奴らよ。

佐久間 看板までたどり着いたみたいだ。

島 理解はしてた？

佐久間 分からない。してないと思う。

蘭 島くん。

島 はい。

蘭 助けてほしいの。

島 もちろんです。あなた達は良き下僕ですから。さあ、私はあなた達後ろにいますから、振り返らずに行きなさい。

島は二人の背後に立ち、肩を叩く。二人は目を開き、出口に向かう。

佐久間 へへ、助かったよ。

蘭 島くん。また会える？

島 ええ、まだどこかで。

佐久間と蘭は出ていく。島は残り、しばし警官たちを釘付けにした後、出ていく。島が去ると、皆開放される。彼らには一瞬で佐久間と蘭が消えたように感じる。同時に幸福感の余韻に襲われる。

■ 8

一ヶ月後。東京。新聞社のロビー。関係者が行き来している。

桜、望、輝夫が待っている。そこに有馬賢一郎が来る。

有馬 (望に) お久しぶりです。すいません最後はご挨拶もできませんで。この度はほんとに――

望 いえそんな、いいんですよ。お互いのあれが、整理が付いてるなら全然。

有馬 それはもちろん、はい、(桜に) な。

桜 うん。後腐れなし。円満に。

有馬 はは、なのでご心配なく。むしろ頼ってくれて嬉しかったよ。(輝夫に) 有馬です、始めまして。(名刺を渡し) 社会部で記者をやっています。

輝夫 始めまして。山田輝夫です。高知で農家やっています。

有馬 レポート読みました。隕石とテロについての。

桜 どうだった？

有馬 面白かった。でも素直に信じろというのも、難しいかな。

望 そうでしようね。

有馬 隕石は今？

望 もちろんあります。

有馬 見れます？

望 ちょっとここでは。

有馬 そうですか。

桜 ファクションじゃないからね。

有馬 それにしちや描写にこだわり過ぎだよ。読み物として面白すぎると、逆に嘘くさくなる。

桜 嘘くさい？

有馬 小説家としての技術が裏目に出てる。

桜 読みやすくしたつもりだけど。

有馬 地球外知的生命体も、神の意思も実に興味深いけど、報道としては聞きづらい。

桜 可能性でしょ。

有馬 事実だけでいい、解釈が多すぎる。

桜 自分の意見を言わないことが賢いことだと思ってるの？

有馬 違うよ。常識を逸脱しすぎると――

桜 それはあなたの常識でしょ？

有馬 きみより一般性は高いと思うけど。

桜 市民代表のつもりですか？ 新聞の権威なんて十年後には地に落ちてるからね。

有馬 新聞社のロビーでよく言ったな。

桜 もう一回言おうか？

有馬 俺の上司にそんな口絶対に利くなよ。せっかく紹介してあげたのに。

桜 あげたのに？ 仕事でしょ？ 普通に考えて超スクープだからねこれ、ま信じ

てないと思うけど。

輝夫 (気色ばむ二人に挟まれて) ……よし、オッケー。わかりました。そろそろ

時間かな。

望 そうですね。

輝夫 あ、このレポート見せたのは、その上司の方だけ？

有馬 いやあと一人、民間の、あの、研究職の方で、専門が脳神経科学です。意見を

貰おうと思ってる。

輝夫 はあ。

有馬 実は僕の幼馴染で、ええ、信用できる人間です。紹介します今度。行きましょ

う。その部屋なんで。

有馬 有馬は三人を待ち合わせの部屋に案内する。

三人は行き、有馬が残る。有馬は電話する。相手は時枝悟。

有馬 もしもし。(時枝:はいはい) 寝てた？ (いや、起きてた) あそう。(うん)

あの、レポート読んだ？ (読んだよ。面白かった) はは、信じられる？ (う

ーん、まあ事実だとしたら、驚きだよね) 驚きだよ。

時枝が電話をしながら別空間に出てくる。

時枝が電話をしながら別空間に出てくる。

時枝が電話をしながら別空間に出てくる。

時枝が電話をしながら別空間に出てくる。

時枝が電話をしながら別空間に出てくる。

時枝が電話をしながら別空間に出てくる。

時枝が電話をしながら別空間に出てくる。

時枝が電話をしながら別空間に出てくる。

時枝が電話をしながら別空間に出てくる。

時枝が電話をしながら別空間に出てくる。

有馬 それで、どう思う？

時枝 うん。脳のね、幸福感を感じる部分てのは、あるよ。そこを活発にするには薬物とか、脳に直接電気刺激を与えるか、ま方法はあるけど、見るだけってことだよ、難しいと思うけどね。

有馬 昔ニュースで見たんだけど、エロい看板のある交差点は事故が多いって統計があつて、調べたら人間はね、エロいものを見ると0・2秒意識が飛ぶらしいんだよ。

時枝 それ何調べ？

有馬 なんかもアメリカの大学。

時枝 アメリカ人だけじゃないの。

有馬 (笑) まあその目を奪われた0・2秒が、事故の原因になる可能性があるんだと。

時枝 へえ。でもそれ、一言で言つて脇見運転でしょう。

有馬 ですよ。(笑)

時枝 いや待てよ。性的興奮が判断力を鈍らせるってのは事実だからね。視覚情報から生じたその0・2秒が、もし5秒だったら重大事故だ。目を奪われるって表現は言い得て妙だな。見るモノに過度に意識が集中してしまう状態はあり得るよ。性的快樂も、幸福感の一種だしな。

有馬 ほほお。

時枝 でもこれが本当なら、先月の渋谷の事件は説明できる。

有馬 そうなんだよ。

時枝 この幸せ隕石使った無差別テロってことですか。

有馬 でも謎の看板は消えてるからね。警察の捜査が進んでる気配もない。

時枝 現場にいた人は、本当に気持ちよくなったの？

有馬 ほほ全員がそう証言してる。だから神経ガスが一番有力って話だけど。

時枝 ああ。

有馬 でも看板とは結びつかないし、毒ガスも確認できず。

時枝 あながちこのレポート間違つてないのか。地球外知的生命体による、未知の物質。

有馬 宇宙人出したら終わりでしょ。何でもありになっちゃう。

時枝 新しい化学兵器の実験かねえ。

有馬 東京、上海、ロンドン、パリ、ニューヨーク、サンパウロ、カイロ、これを敵に回す国ってどこよ。

時枝 国じゃないのかも。レポートだと宗教団体って線も指摘してあつたけど。聖書の引用してるし。

有馬 まあ組織にしろ宇宙人にしろ、未だなんの声明も出てないからね、何がしたい

のっていう話だよ。

時枝 なに有馬君、このレポート、ニュースで取り上げるの？

有馬 いやあ。知り合いが持ち込んだネタなんだけど、正直扱いに困ってる。(部屋から出てきた桜たちを見つめる) あ、ごめん、また電話する。ありがとう。

桜、望、輝夫が歩いてくる。

有馬 どうしたの？ 随分早かったね。

桜は首をひねってみせる。

有馬 どうしたんですか？

輝夫 あー、話も聞かずに、まず石を見せろって。

桜 半笑いだった。

有馬 ……。(輝夫に) 見せたんですか？

桜 見せるわけないでしょ。

有馬 でもやっぱり、見せてくれないとこっちも、信じられないんだよ。俺も見たいよ。見せてくれたら、協力しようもある。

望 桜、見せた方が早い。

桜 ……。(首を振って拒否)。

望 なんて？

桜 駄目。

望 だってこれ俺たちがずっと持ってるでも、どうすんだよ。何か解決できるか？ 世界的な事件だよ？ その手がかりがここにある。ここで止めてちゃ駄目だよ。慎重にやろうって言ってんの。

望 警察に渡して、分析してもらうなり、した方が役に立つだろ。

桜 なかったことにされたら？

有馬 報道するよ。その為にも証拠を共有させてくれ。

輝夫 別に有馬さんには見せていいんじゃない。

桜 ……。

輝夫 この人は味方だよ。多分ね。

有馬 (うんうんと頷く)

望の言う通りだと思うよ。

桜 なに、部長まで。

輝夫 俺たちがこのまま隕石を持ってても、話は進まないよ。

桜 降りるの？

輝夫 桜ちゃん、俺たちはこの物語の主人公じゃない。

桜　じゃあなんで、私たちは、私たちの前に、隕石は落ちてきたの？  
輝夫　たまたまだよ。

桜は失望を隠せない。  
望は鞆から箱を出す。

望　これです。隕石。  
有馬　えここで？　ちよ、だ、大丈夫なん……

望は有馬が言い終わる前に、有馬の目の前で箱を開ける。有馬は隕石に意識を奪われる。

望と輝夫と桜は慣れた様子で目をそむけている。数秒して箱を閉める。  
有馬は我に返るが、見たことを覚えていない。

輝夫　どう？  
有馬　なにが？  
輝夫　だからその、隕石。  
有馬　隕石。ああはい、え？  
輝夫　（舌打ちして）説明が面倒くせえ。  
有馬　え？  
輝夫　もう見たんだ。味わって。（と胸を叩く）

有馬は胸に手を当て、目を閉じる。幸福感の余韻を感じる。

有馬　ああ……。  
輝夫　いいでしょ。  
有馬　んふふ……  
桜　きもちわる。  
有馬　うるせえ。  
桜　よかったね、まだ幸福を感じる心があつて。  
有馬　ああ、この数年感じたことのない感触だよ。  
輝夫　よく結婚したよね、キミら。  
望　有馬さんは今隕石を見たんです。分かるでしょ、レポート読んだなら。  
有馬　ああ、はい。はい。はは。  
望　（桜に）俺たちは隕石とあの事件を繋げて、隕石をメディアの前に持ってきた。充分すげー仕事したと思うよ。この先は、メディアや警察、専門家がやってくる。

輝夫 バトンを渡そう。

望 いいよな、桜。

桜 兄貴ぶつた言い方やめろ。

望 はいはい。

有馬 じゃあ、隕石は預けてもらえるんですか？

望 いや流石にもう少し待っててください。

有馬 信用してくださいよ。

望 だってまだ飲み込めてないでしょ？ 改めてレポート読んでみてください。

有馬 はい。いつまで東京に？

望 日曜まで。

有馬 分かりました、連絡します。

望 じゃあ、今日は。

有馬 出口まで。

望 大丈夫です。ありがとうございます。

有馬 じゃあ、すいません仕事に戻ります。ありがとうございました。

皆で会釈をし、有馬は立ち去る。

桜 もし、彼が上を説得できなかったら？

望 他を探すしかないよ。

桜 ネットに上げて反応を見るとか。

望 これについては陰謀論だらけだからね、埋もれるんじゃないかな。

桜 私も見たけど、ここまで具体的なのは無かったし、隕石の存在も知られてない。信用できる人がアクセスしてきたらいいけど。

輝夫 いや実際これ面白いじゃない？ 結構食いつくと思うんだよ。でも面白半分の連中とどう区別するのかというね。

望 そうね。

輝夫 それにね、実は結構危ないと思うんだよ。ラッパ屋しかり、この事件に関わった人間がいるわけだろ。こうやってメディア回ってるのだから、この中にその組織の関係者がいる可能性だってある。これ国レベルで起きてることだからね、いつ誰が俺たちに気付くか分かんねえんだよ。関係した奴はこのレポートが事実だと分かるよね。ネットから俺たちにアクセスしてきた連中が、犯人という可能性も大いにあると思うんだよ。これ要するにね、俺たち、消される可能性もあるってことです。

三人、顔を見合わせる。輝夫は思わず笑う。



望 消されるとかなかなか無いですよね。  
輝夫 無いよ普通。

桜 でももし「その石を守ってくれて感謝する」みたいな人が現れたら？  
輝夫 そりやアガるでしょ。「拾ったのが、お前たちで良かった」とかね。

望 そんなフイクションみたいなこと。  
桜 分かんねえよお。

輝夫 拷問とかだけはされたくねえな。

望 怖い怖い怖い。

桜 とりあえず行かない。お腹空いた。

輝夫 そうね。(時計を見て) もう一時半だわ。

桜 ちよつと歩くけどいい店知ってるよ。ランチタイムには間に合うと思う。

桜が歩き出す。追って望と輝夫も歩き出し、出口へ向かう。

輝夫 なんの店？

桜 カレー屋さん。

輝夫 おおいしいねえ。(ほころんだ顔に笑顔が張り付く)

桜 (笑) 超笑顔じゃないですか、お腹減ってたんでしょ。

輝夫 ええ？ そつちこそ。

桜と輝夫は不自然に声が弾んでしまう。望がいない。

桜 あれ、望は？

輝夫 どこ行った？

二人は辺りを見るが、望はいない。関係者が行き来している。

桜 今ここにいたよね？

輝夫 うん。あれ？ うおおお(笑)消えた。えマジで？ ちよつと電話してみるわ。

輝夫は携帯電話を出す。携帯の時計は13時33分を表示している。ついさつき見た腕時計から三分は経っていないことを直感する。輝夫は腕時計と見比べると、携帯との時刻は合っている。

桜 どうしたの？

輝夫 (急に緊張感を増す) あ、ちよつと待って、あれ？

輝夫は二分弱の空白が生まれていることを理解する。確かに幸福感もあったと胸をかく。

桜 え？

輝夫 え、え、マジで。

輝夫は辺りを見回す。隕石を持った何者かに目を奪われ、望がさらわれたと直感する。輝夫は動揺を隠せない。

桜 なになに？ え？

輝夫 うわ、うわ、あ、うわああ、やばいやばいやばいやばいやばい。

桜 え？ え？ なに？

桜は分からないながらも輝夫の取り乱しかたに怯える。

輝夫 時間、時間。(時計を指す)

桜 え？

輝夫 二分、二分無くなった。

桜 え、なに？ なに？ 分かんない！

輝夫 二分、取られた、時間、二分。

桜 ちよ、しつかりして、分かんないから。

桜は混乱する輝夫をつかむ。

輝夫 隕石だよ、たぶん俺たち今、隕石見せられてた。

桜 え？

輝夫 誰かが二分、俺たちの目を盗んだんだよ。その間に望が消えた。

桜 ……嘘でしょ。え、なに、なんで、え、さらわれたの？

輝夫 分かんない分かんない。

桜 そういうことでしょ。

輝夫 待つて待つて、あいつ自分で見せて、どっか行ったのかも。

桜 なんで？ なんで？

輝夫 うん、いやそういうことも。

桜 そんなわけないじゃん！ だってあの流れでそんなことする？

輝夫 分かんないよ俺だつて。

桜 さらわれたんだ。どうしよ、どうしよ。どうしたら。

桜も混乱し、取り乱す。

輝夫 とりあえず、行こう、ここを出よう。

桜 なんて？

輝夫 ここに居ちゃマズい気がする、俺たちも。

桜 でも！

輝夫 いいから、ほら、早く。行こう。

桜はその場を動かこうとしない。輝夫は焦り、桜に駆け寄る。暗転。

■  
9

「2051年」と提示する。

高知県。市街地へ向かう国道沿いの街。高知市に立つ柱がよく見える。街は廃墟で、植物に侵食されている。誰も住んでいない地域。

廃墟ビルの中、山田和夫がいる。そこに神崎恵が現れる。和夫は咄嗟に逃げようとする。

神崎 待て待て！ 違うから。逃げんじゃねえ。

和夫は警戒しつつ、神崎を見る。

神崎 追われてんのか？

和夫 うん。

神崎 誰に？

和夫 村のみんな。

神崎 どの村。

和夫 金輪町。

神崎 あああ、昔お祖母ちゃんから聞いたわ。伝説の、あれだ。名前忘れたけど。私は土佐の南、中骨ってところから来た。クソみたいな村。

和夫 食べ物ある？

神崎 みかんあるよ。(みかんを出す) 自生してたやつだからあんま甘くない。てかクソ苦え。

和夫はみかんを受け取り、食べる。神崎は棚にある缶詰を手取る。

神崎 食ってなかったの？

和夫 (食べながら) うん。

神崎 ここに缶詰あるよ。賞味期限が切れて五十年近く経ってるけど。(と笑う)

神崎は缶詰を投げる。缶詰は窓ガラスを割り、外の道路に転がる。

和夫 (驚き、慌て) ちよ、何やってんの？

神崎 誰も居ねえよ。

和夫 分かんないでしょ。

神崎 こんなとこ誰も住めない。見晴らし良すぎるからね。(窓から身を乗り出し)

こんな、御柱様が丸見えの昼間に、人を探し回ることなんて出来ないと思うよ。普通。

和夫 じゃあ、アナタはどうやって来たの。

神崎 アンタこそ。……名前は？ 私は神崎恵。

和夫 和夫。山田和夫。みかん、もう一個いい？

神崎はみかんを渡す。

■ 10

2001年。8場から数日後。

高知、金輪町。二階堂家の一室。輝夫が待っているところに桜が来る。

桜 どうだった？

輝夫 うん……

桜 なんか新しいこと分かった？

輝夫 駄目だね。警察としても、これ以上できることはないって。

桜 なにそれ。

輝夫 裏口も含めて、出入り口の防犯カメラに望らしき人は写ってないし、人間を入れたような荷物を持ち出した人もいなかったって。

桜 ー。

輝夫 有馬さんはなんて？

桜 やっぱり見た人はいないって。

輝夫 ま今もあの建物にいるってのは現実的じゃないわな。

桜 ……消えたね。

輝夫 ああ。完全に消えた。

桜 ……これ、本当にさらわれたのかな。

輝夫 どういう意味？

桜 いや、なんとなく。なんで、望だけ？

輝夫 隕石持ってたからじゃねーか。

桜 犯人は、テロ組織だと思ってる？ 部長は。

輝夫 はは、いや桜ちゃんの言いたいことは分かるよ。これももう人間業じゃないからね。ワープですよ。それかあの隕石が、なんか人間を瞬時に転送する、あれがあるとかね。知らんけど。

桜 望はどこに？

輝夫 分かんないよ。とにかく、確実な証拠だった隕石がもう無いんだ。望を探そうにもこんな話、誰も信じない。

桜 あのレポート、ネットに公表しよう。

輝夫 危ないよ。

桜 望を狙った時点で私たちにも気づいてる。でも何もしてこない。

輝夫 それは、そうだけだ。

桜 他にも隕石を拾った人がいるかもしれないし、ラッパ屋も見るともしれない。

輝夫 手がかりは見つかる。

桜 これ以上首を突っ込まない方がいいって。

輝夫 部長。なんで日常に戻ろうとするの？ もうとっくに日常は壊れてる。宇宙人が来た、そう思ってるくせに言葉にするのを避けてる。面白がってる時は言ったのに。自分の気持ちに気づいてるくせに誤魔化して、茶化して、逃げようとしてる。

輝夫 身の危険を犯してまで、俺たちに来ることはないよ。

桜 大人ぶって、本当は怖がってる。

輝夫 そうやってダンナも追い詰めたか。

桜 ……。

輝夫 あー、ごめん。

桜 『未知との遭遇』を思い出せよ。部長が言ったんだよ。未知との遭遇！

輝夫 ……。

桜 私は知りたい。だから戻らない。

輝夫 分かった、分かった。俺たちに、できることをやろう。

桜 できそうにないことでも、やるの。

輝夫 分かったよ！ うるせえな。やるよ、なんでも。

桜 ……望は生きてる。

輝夫 ああ。

桜 望は、生きてる！

輝夫 望は生きてる。

桜は本棚から聖書を持ってきて、輝夫の前に置く。

輝夫

聖書？

桜 　はい。馬鹿にしないで聞いて。  
輝夫 　はい。  
桜 　宇宙人じゃない。  
輝夫 　え？  
桜 　宇宙人じゃない。  
輝夫 　はあ。てことは、(聖書を指し) 神？  
桜 　そう。  
輝夫 　なんてこった。  
桜 　何かヒントがあるんじゃないかと思って、(聖書を指し) いろいろ調べたの。  
輝夫 　はあ。  
桜 　それでね。  
輝夫 　うん。  
桜 　あれはひよつとしたら、ラブチャーなんじゃないかって。  
輝夫 　ラブチャー？ なにそれ？  
桜 　キリスト教の終末論にあるの。七つの厄災によって地上が地獄と化す前、神に選ばれた者だけが天上にすくい上げられ、永遠の命を得る。  
輝夫 　…俺たちは？  
桜 　選ばれなかった。  
輝夫 　ジーザス。  
桜 　望だけじゃない。多分世界中で起きてる。沢山の人が消えてると思う。  
輝夫 　そんなんもうオカルトじゃない。  
桜 　オカルトの世界なんだよ。  
輝夫 　え、それは、ニュースになったりしてないの？  
桜 　調べたけど出てこなかった。でも日本でも行方不明者は毎年増加してる。こないだもそこであつたでしょ。  
輝夫 　待って。望は隕石を持っていたから、あれなんじゃないの？  
桜 　ラブチャーは隕石が条件じゃないと思う。  
輝夫 　え、でもなんで？ 分かんない分かんない。  
桜 　あの同時多発テロは、まだ聖書にある七つの厄災じゃないと思うの。看板に描かれたラッパを持つ天使は、これから起こることを暗示してる。  
輝夫 　これから？  
桜 　そう。  
輝夫 　これから、その、厄災？ 地獄が来るってこと？  
桜 　あれはメッセージだよ。その厄災の時代を、キリスト教では大艱難時代って言うんだけど、ラブチャーはその前に起こるって書かれてる。  
輝夫 　つまりラブチャーが起きたってことは、これから地獄が来る。  
桜 　そう。

輝夫 聖書やべえな。で、地上に残された人はどうなるの？ 全滅？

桜 ううん、生き延びたら、神様と一緒に、千年王国。

輝夫 (笑う) そりや楽しそうだな。

桜 生き残る為の、準備をしない？

輝夫 (頷き) このことをみんなに伝えないと。

桜 そう。

輝夫 誰も信じないと思うけどね。

桜 やらないよりはまし。

輝夫 (笑) まあね。

桜 信じてないんですよ。

輝夫 信じるっつー方が無理でしょ。までも、未知との遭遇から逃げないことにするよ。

桜 …… (笑)

輝夫 生き残ったら、また望に会えるかな。

桜 会えるよ、神様と一緒になんだから。

■ 11

2051年。9場と同じ廃墟ビル。夜。

和夫と神崎がいる。そこにランプを掲げた山田聖子が来る。

聖子 和夫？ 和夫？

和夫 お母さん。

聖子 (和夫を見つめ) ああ。大丈夫？

和夫 うん。

聖子 (神崎に気づき) え？ え？

和夫 大丈夫、友達。友達だよ。

聖子 そうなの？ えでも、なんで？ こんなところで？

和夫 彼女も自分の村を追われたんだ。

神崎 追われたっつーいうか、自分で出てきた。

聖子 そうなの？ え？ あ、ほら、とりあえずご飯。これ。(風呂敷を広げる) 良

神崎 かつたらあなたも。

神崎 いただきます。

和夫は握り飯を手取る。神崎はポケットや鞆に詰め込む。

聖子 ごめんねえ。昨日まで月明かりが強くて、やっとなんか曇ってくれた。

和夫 捜索隊は？

聖子 今日はお出でない。

和夫 僕、どうなるの？ 牢屋に入れられる？

聖子 そんなことさせないから。

和夫 嘘だつて言うよ。御柱様が見えるなんて嘘だつて言う。

聖子 無理よ。それに町長は知ってた。噂があつたみたい。遠くの町で、見える子が生まれたつて。

和夫は神崎を見る。

聖子 え、じゃああなたも。

神崎 はい。

聖子 そうなの。

神崎 和夫。嘘なんて言う必要ねえよ。御柱様は神様じゃねえ、クソでけえただの柱だ。

聖子 ちよつ、……は、はは、ははは（笑う）

外で物音がする。皆、それに気付く。

和夫 他に誰か？

聖子 そんなはずない。今日は祭の準備で……（言葉が途切れる）

窓際に行くと、雲の切れ目から月明かりが漏れる。月光は柱を照らし、聖子は目を奪われる。

和夫 母さん？

聖子の返事はない。神崎は聖子の隣に行く。

神崎 （笑）月が出てる。

神崎はそつと聖子の目を閉じる。

聖子 え？

神崎 御柱様のとりこに。

聖子 ああ。ありがとう。（神崎は聖子の向きを変え、手を離す）はは、ははは。あれ、なんだつけ？



神崎は窓際で柱を見ている。

神崎 柱がよく見えら。

聖子 そっか、あなたも、あの幸福を知らないんだね。

神崎 タダで貰える幸福なんていらぬ。

聖子 ……その通りね。

大道寺修が入ってくる。

大道寺 こんにちはあ。

聖子 え？

大道寺 大道寺です。おお、坊っちゃん見つけましたか。ご無事でなにより。

聖子 どうしたの？ あなた。

大道寺 いえ、奥様が出るのが見えましたんで、ええ、時間も時間ですし、何かあっちゃいけないと思ひまして。

聖子 そう。

大道寺 お一人での遠出はいけません。こんな月の明るい夜に。（和夫に近づく）坊っちゃん、帰りましょうや。

和夫 ……（聖子を見る）

聖子 あなた、町長に何か言われたでしょう。

大道寺 いえ、何も。（和夫に手を差し伸べる）さあ坊っちゃん。みんなが待ってます。

和夫は大道寺から距離を取る。大道寺は和夫を追う。聖子は大同時のすきを見て背後に周り、柱の見えるところへ押し出す。

大道寺 お、おとおお……

大道寺は柱に意識を奪われる。聖子は成功したことに驚いて笑う。

聖子 はは、ははは、はあ……

和夫 いいの？

聖子 いいのよ。和夫、あなたは帰って来ちゃだめ。

和夫 え？ なんで？

聖子 このまま、金輪町を出なさい。

和夫 そんな、無理だよ。

聖子 町長はあなたを利用しようとしてる。それは多分、間違ってる。

和夫 ……僕は、どうやって暮らしていったらいいの？

神崎 どうとでもなる。  
聖子 そう。あなたたちは自由だから。  
和夫 ……そんなの無理だよ。  
聖子 和夫、しっかりして。  
和夫 無理だよ……

島と望が現れる。皆それに気付き、警戒する。

聖子 え、え？ 誰？ ですか？

島 島忠です。

聖子 誰？

島 島、忠です。

聖子 知らない。搜索隊じゃないのね？

島 搜索隊じゃありません。

聖子 え、じゃあ何？

島 ですから、島忠です。

聖子 知らないし。

望 まだ分からないの？ キミの俳優という属性はとつくの昔に意味を失っているんだよ。

島 誰と聞かれたから名前を答えただけじゃないか。

望 (和夫と神崎を指し) キミと、キミ、(聖子を見て) キミは違う。

聖子 何よ。

望 (和夫と神崎に) 二人は、あれが見えるんだね？

神崎 見える。

和夫 ……(頷く)

望 キミたちだけじゃない。仲間がいる。

島 そして恐らく世界中に。

望 みんな子供だ。……一緒に来るかい？

和夫と神崎は見合わせる。

和夫 あなたは誰？

望 僕らは――

聖子 ちよつと待って。ちよつと待って、え、見たことある。知ってるかも、あなたのこと。

島 私を？

聖子 違う違う。(望を指す)

望 僕を？

聖子 写真で見た。あなたの写真が、私の家にはある。父と一緒に写った写真。

望 父親の名前は？

聖子 山田輝夫。

望 ……。そうか。娘か。

聖子 二階堂望？

望 ええ、二階堂望です。

聖子 嘘でしょ。だって写真のままじゃない。あの写真はもう、柱の降る前、五〇年

も昔の写真なんだよ。え？ なんで？ 嘘でしょ？ なんで？ 幽霊？

望 違います。落ち着いて。

聖子 え、なんで、どうなってるの？ 和夫駄目よ、この人と一緒に引っっちゃ。来な

いで！

怯える聖子の背後に回り込んだ島がそっと肩を抱く。

島 落ち着いて。大丈夫です。私たちは正しく、存在しています。

聖子は力が抜け、島に支えられて座り込んでしまう。

望 ……部長は元気？

和夫 お祖父ちゃんを知ってるの？

望 知ってる。

和夫 死んだよ。

望 そうか。

和夫 お祖母ちゃんがポケちゃってね、じいちゃん、ばあちゃんを連れて、自分から柱の麓に向かったんだ。

望 いつ？

和夫 先月。

望 先月。(窓の方を見る)

和夫 もう無理だよ。見てきたから。半分くらい、鳥や獣に食べられてたけど、しっかり抱き合ってた。

望 ……

神埼 ホントに見てきたの？

和夫 うん。

神埼 は〜。

望は涙が流れたことに気付く。

望 島  
キミ、泣けるんだ。  
さあ、体が勝手に。

望は大道寺の腕を引いて柱から開放する。

大道寺 あ、ああ。(望と島を認め) あ？ なんだ、あんたら？  
望 さあ、金輪町に向かいますよ。皆さんに話したいことがあります。

皆、建物を出ていく。

望は最後に、12場の輝夫と桜を一瞥して出ていく。

■ 12

2001年。10場の続き。

11場の間、二人の時間は流れている。資料を集めたり、何か作業をしている。情報量を落とし、11場の後景として存在する。

桜 部長はどうして、天文部？  
輝夫 うん。俺ずつと農業やってさ、まあ色々便利なわけよ、天気予報は精度上がってるし、農機具は年々進化するし、肥料や農薬もね。最新の研究成果もネットで手に入るし。論文とか。

桜 論文とか読むの？

輝夫 読む読む。

桜 へー。

輝夫 でもふと思ったんだよね、昔はこういうの全部無かったんだよなって。

桜 あー、有機野菜とかオーガニックとか言ってる？

輝夫 いやそれもあるけど、え馬鹿にしてる？

桜 (笑) してないしてない。

輝夫 種蒔いて、世話して、収穫な。いつ何をするか、ちゃんと分かってないといけない。大事なものは何？

桜 えー、気温？

輝夫 それもある。つまりカレンダーだよ。歴ね。昔の人は夜空を見て、あの星座があそこに来たってことは、そろそろ種まきだなとかね。

桜 あああ。

輝夫 基本地球の動きと連動してやっていますんで。

桜 だから天文学。

輝夫 北極星の位置や星座を見て、収穫の時だ、とか言えたら格好いいでしょうよ。

桜 分かるの？

輝夫 分かる分かる。星見て大体の気温とか日の出日の入りの時間とか、言えるよ。へえええ、単なるSF映画ファンじゃないじゃん。

輝夫 マジで馬鹿にしてるよな。してないって。

桜 ただの農家のおっさんと思ってただろ。

輝夫 だって農家のおっさんじゃん。

桜 ほんと腹立つ。

桜は笑う。

輝夫 俺も聞いていい？ あの、あれだったらいいんだけど、その、答えなくても。

桜 なんで、キリスト教？ 信者とかそういうこと？

輝夫 別に洗礼も受けてないし、教会に通ってるわけでもないけど、信じてる。なんとなくね。

桜 な、なんで？

輝夫 おかしい？

桜 おおしくはないけど。でもキリスト教を信じると、あの事件が神様のシナリオだって信じるのは、別物だろ。

輝夫 そうだね。でも、そう解釈したの私は。そうとしか思えないから。

桜 神様を信じているから。

輝夫 そう。

桜 望は違うよね。

輝夫 だからなんで望が選ばれて、私が選ばれなかったんだろうってずっと思ってる実は。

桜 はは（笑）……さすが小説家。えいつから？

輝夫 部長の頃もいたのかな。小学校の時さ、学校の帰り道に布教してる人いなかった？

桜 いたいた。なんか冊子配ってたよ。

輝夫 そうそうそう、こんな小さい冊子じゃない？

桜 たしか。

輝夫 子供向けに聖書の物語が絵で描いてあるの。なんかあの絵にハマっちゃってマジで？ それで？

桜 私ね、そこに描かれたマリア様とキリストを、自分のお母さんとお父さんだと思つたの。子供だったし、物語も分かってなかったから。

輝夫 ああ、ご両親が、そうだよな。

桜 母は私を産んですぐ死んだし、父は五歳の時に蒸発したから。あの冊子を見な

輝夫　　がら、いつかこの二人が私を迎えに来ると思ってた。いやその頃の話だよ。ま後でこの二人親子かよって知ったんだけど。

輝夫　　そうね。

桜　　でもなんか、残っちゃったのよ、私の中に。物語が必要だったの。

輝夫　　うん、分かるよ。

桜　　布団の中でずっと見た。お祖母ちゃんに捨てられたけど。

輝夫　　弾圧された。

桜　　最初の迫害だったわ。

輝夫　　大げさ。異端かよ。

桜　　桜は笑い、なんとなしに聖書をパラパラとめくる。

輝夫　　その物語は、今も必要なの？

桜　　うん。

輝夫　　なんで？

桜　　だって、答えの無い問題ばかりだから。部長だって今「なんで？」って。なんでなんでなんで？　なんでこんなことが起こるの？　なんで世界はこんななの？　なんで私はこんななの？　なんでなんでなんで？

輝夫は何と答えていいか分からず、ごまかすように笑う。

桜　　なんで？

輝夫　　……

桜　　なんでなの？

輝夫　　分からないよ。

桜　　分かるうとしてない。

輝夫　　考えてる。俺だって。でも俺は、キミの予言が外れることを願うよ。

暗転。

■ 13

2002年、1月。世界中の都市に、柱が降り注ぐ。

柱は直径30メートル、長さ300メートルの黒曜石のような質感の円柱。隕石と同じ効果がある。

遠くで、微かな風切り音の後に、ずん、と地響きが聞こえる。

折り重なった無数の人の声が唐突に止み、声以外の音が際立つ。

各々の方向に歩いていた人々が、引き寄せられるように皆同じ方を向いて

立ち止まる。

以下、表現の参考に記す。

車や電車、飛行機など、乗り物の運転をしていた者は、事故を起こす。工場や厨房、医療現場など、あらゆる作業は途中で止められ、事故や火災になる。規模の大きなものは深刻な状況になる。

管理者の停止により、多くのシステムがダウンし、あらゆるインフラが不安定になり、数日で都市機能はほぼ停止する。情報の伝達と共有も遅くなり、不安は募り、救助は来ない。

ある程度離れていれば、夜は視界不良で開放される。しかしその瞬間、混乱が始まる。空腹と乾き、疲労に襲われ、理性的な行動を取るのは難しい。あるいは幸福感の余韻に心を奪われている。

再び日の出と共に柱につかまり、ほとんどの人が起きてることを理解できないまま死んでいく。遺体は放置され、ネズミやハエが大量発生し、衛生状態は極度に悪化する。

郊外に逃れた人たちが難民となり、地方の小さな町に押し寄せる。そこでまた混乱が始まる。

中長距離ミサイルが破壊の手段としてあるが、市民の残る都市部ゆえ、政府は判断を下せない。ただし破壊ができるかは不明。破壊したとしても、破片が広範囲に飛び散り効果は続き、または悪用される。

■ 14

東京。柱の落下直後。中野のビルの一室。

携帯電話の着信音がする。時枝が受ける。相手は有馬。

時枝 はいはい。

有馬 今どこ？

時枝 研究所。

有馬 どのの？

時枝 中野。

有馬 そこ窓ある？

時枝 あるけど、仮眠室だから今――

有馬 開けなくていい。外見るな。

時枝 え？

有馬 カーテン閉まつてるな。

時枝 うん。

有馬 寝てた？

時枝 うん。え、なに？  
有馬 ああ、去年の春頃、隕石のレポート見せたよな。幸福隕石。  
時枝 ああ、うん。  
有馬 それと同じのが、ビッグサイズで落ちてきてる。今、東京に……え？　じゃあ街は、壊滅？（信じていない）  
有馬 それが、爆発にはなっていない。落ちてきて、刺さってる。  
時枝 刺さってる？  
有馬 形は隕石というより、真っ直ぐな杭というか、柱。  
時枝 え、サ、サイズは？  
有馬 東京タワー、くらい？  
時枝 東京タワー。  
有馬 並んで立ってる画像があった。  
時枝 300メートル。柱。  
有馬 降ってきた。  
時枝 降ってきた。  
有馬 ああ、刺さってる。  
時枝 刺さってる。  
有馬 きれいに。  
時枝 ええ……（徐々にイメージを作りあげる）  
有馬 いいよ、待つ。咀嚼して。  
時枝 え、見たい。  
有馬 見れないんだよ。見たら最後。レポート思い出せ。PCある？  
時枝 ああ。  
有馬 画像集めて送ったから。  
時枝 おおお。  
有馬 繋がって良かったわー。テレビ局とか、公共の定点観測カメラの映像を集めたやつが出回ってる。生中継のヘリが遠くから写した映像もあったけど、途中で切れた。多分パイロットが意識失って落ちたんだろ。見れた？  
時枝 （見て絶句）……でかいねえ。  
有馬 でかいよ。  
時枝 嘘みたいな画だな。巨大なうまい棒チョコ味にしか見えん。  
有馬 はは……  
時枝 ここ新宿か、近いな。  
有馬 窓開けんなよ。  
時枝 （別の画像を見て）こっちは銀座。これは、赤坂かな？　何本落ちたの？  
有馬 分からんし、今も落ち続けてるみたい。  
時枝 え、キミ今どこにいるの？



有馬 取材で小田原なんだ。

時枝 あそう。

有馬 幸か不幸か。

時枝 じゃあ街は今、あのテロの再現か。

有馬 再現どころじゃないかもな。規模がもう。電車が脱線してビルに突っ込んだのがテレビに出てたよ。

時枝 そうなるよな。

有馬 問題はあれが何かってことを、誰も理解してないってことだよ。メディアも消防も全く機能してない。見ちゃいけないってことを伝えなくちゃいけないのに。あのレポートは？

時枝 送れるところには全部送った。でもこの状況で読んでもらえるか。お前だけだよ、こんなに話が早いのに。

衝撃が来る。時枝のいるビルの近くに柱が落ちる。

時枝 お、おお。おおお……

有馬 どした？

時枝 近くに落ちた。多分。

有馬 なんてこった。

時枝 どうしたらいい？

有馬 今んとこ東京と大阪らしいから、なんとか首都圏を離れるしかない。

時枝 ごめん、聞き取れなかった。雑音がすごい。

有馬 回線がダメーシ受けたのかもな。おそらく二、三日で、都市機能は失われる。大げさじゃなくて。だから、とにかく逃げろ。

時枝 逃げろっていつてもな。

有馬 それと大事なこと、言うけど、上野にも落ちてる。浅草寺の裏。

時枝 うそ？

有馬 映像で見た。間違いない。俺らの地元、うまい棒の下だ。

時枝 ……

ビルの外で車が衝突する音がする。クラクションが鳴り響く。

有馬 だから戻るなよ。自分が生き残ることだけ考えろ。八王子に従兄弟がいる。そこで合流しよう。後で住所送るよ。今はとりあえず、夜を待った方がいい。昼間はどうやっても目に入るから。聞いている？ おい。おい。

回線が切れている。

時枝 ……そうか。さて。

時枝は仮眠室を出て、注意深く足元だけを見て進む。別室へ行くと、窓際に数人が立って外を見ている。(13場の群衆のシーンを後景としてここまで残しておいてもいい)

時枝 すいませーん。すいませーん。(反応は無い) ……益子さん？

時枝は慎重に皆の方へ進み、手探りで益子の腕を引く。

益子は体勢を崩し、柱から目をそらす。幸福感の余韻に襲われている。

時枝 (うつむいたまま益子の顔を見ないで) あの、益子さん、聞いて。

益子 え？ あ、時枝先生？

時枝 はい。

益子 あ、なんか今、すごい音したんですけど。(窓を見ようとすると振り向かないで！)

時枝 (驚いて止まり) え、どうしたんですか？

益子 すいません。そのお、このアイマスク、してもらえますか？(と自分がつけたアイマスクを渡す)

益子 え、なぜに今？

時枝 お願いします。

益子 ちょっと、何プレイですか。

時枝 いやそうじゃなくて、ちょっと今真面目に、お願いしてるんです。

益子 はあ。(アイマスクをつける) わかりましたよ。

時枝 さっきの、柱が落ちた音です。ニュースになってるやつ。

益子 ああ、え、こっから見えるんですか？

時枝 もう見てたんです。

益子 え？

時枝 ちょっと、座りましょうか。益子さん聞いてください。去年の忘年会であなたに、テロ事件の真相について僕が話した仮説を覚えていますか？ 幸福感を与える物質。

益子 あああ。

時枝 あの柱、あれと同じ効果があるようです。

益子 あああ。

時枝 理解しました？

益子 あ、あ、あ。

時枝 あれ？

益子 ど、どんな話でしたっけ？

時枝 結構一生懸命話したのに。

益子 すいません。

時枝 命にかかわる問題ですよ今。

益子 ひー。

時枝 まあいいです。どうすつかな。ええとあの、メドゥーサっているじゃないですか？

益子 はい？

時枝 ギリシヤ神話のメドゥーサ。目が合うと石にされちゃう奴。

益子 あああ、はい、頭ドレッドの。

時枝 あれ蛇です。神話だとね、鏡の盾を装備して、鏡越しにこう、見ながら戦ったのね。

益子 誰が？

時枝 ええと、それは今はいいです、なんかマツチヨな人ですよ。ペルセウスだ、ペルセウス。

益子 それはもう、いいんです。

ビルの外で車が衝突する音や、爆発音がする。

益子 え？ なに今の？

時枝 後で説明しますから。そのメドゥーサと、現代ならどう戦いますか？ 意見をください。

益子 はい！ えー携帯とか、カメラの液晶見ながら？

時枝 でも本体も視界に入っちゃいますよね。

益子 そっか。じゃあ、何かスコープ的な、特殊部隊がつけてるみたいなの。

時枝 そんなのここにはないでしょう。

益子 ヘッドマウントディスプレイがあるじゃないですか。ゲームに使ってる。あれの外部入力にビデオカメラ繋げばいいんじゃないですか。

時枝 それいけるかもね。でも一個しかないか――

益子 ていうか結局、やっぱ鏡が一番いいんじゃないですか？

時枝 ……そうだよ。まずそれ試してみないと。ある？

益子 ありますよ。

益子はアイマスクを外し、ポーチから手鏡を出す。

時枝 窓の外見てみて。気をつけて、絶対に直接見ないこと。  
益子 (鏡越しに見て) あ、あ、あ。  
時枝 見えた？  
益子 見えます見えます。黒い柱、えー、何あれ。  
時枝 ありがとう。小さな大発見だよ。  
益子 でかっ。  
時枝 ブラインド閉めるから、もし私が固まったら、助けてね。  
益子 は、はい。

時枝は窓の外を見ないように気をつけながら、ブラインドを閉める。  
すると窓の前に固まっていた研究所職員たちは開放される。

■ 15

柱から三日目。東京。避難地域の空き家。佐久間と蘭は家探ししている。

蘭 うう、寒。東京の冬って寒いんだね。  
佐久間 寒いよ。  
蘭 この気温だと、今夜は沢山死ぬんじゃない？  
佐久間 三日目だからな。持たねえだろうな。  
蘭 早く逃げようよ。  
佐久間 もうちよっと待ってよ、俺まだ収穫が。

佐久間は貴重品を探している。通帳などを見つける。

蘭 だから現金なんて意味ないって言ったでしょ。通帳とか集めて馬鹿？  
佐久間 うるせえな、念の為だよ。  
蘭 そんなの紙くず。燃やしたほうがまだ役に立つわ。  
佐久間 ふん、お前が集めたのだって、これから役に立つかどうか。  
蘭 負け惜しみ。  
佐久間 (手にしていたものを投げ捨て) ……ここまでとはな。  
蘭 これからよ。  
佐久間 どうなるんだこの国は？  
蘭 終わりね。  
佐久間 島くんは、このことを知ってたんだらうか。  
蘭 知ってたでしょ。  
佐久間 聞いてた？  
蘭 ううん。

佐久間 あいつ一体何だったんだろ。  
蘭 何だっていいわよ。

佐久間 なんで俺たちに……

蘭 (笑い) なに？

佐久間 え？

蘭 感傷的になって。

佐久間 いや。……俺たちはあれが何だか良く知ってる。だから生き延びてる。周りは死体の山だ。これは何だ？ って思うだろ。

蘭 ついてたよね。

佐久間 三日経っても未だ飛行機が飛んで来ては落ちてる。

蘭 お偉いさんが馬鹿なんだよ。

佐久間 馬鹿なんだな。

蘭 予習する時間もくれたのにね。

佐久間 予習？

蘭 看板。

佐久間 そっか、そうだよな。あれそうか、予習か。予習の問題が解けなかったのか、人類は(と笑う)。

蘭 ネットで一生懸命叫んでたのもいたけど。

佐久間 ああ四国の。

蘭 あのレポート次があるって予言してたでしょ、すごいよね。

佐久間 あれを信じた奴がどれだけいるかね。

蘭 んああ。

佐久間 ……ほんとに神様なのかな？

蘭 (笑) 知らないよ。

佐久間 俺は不思議なんだよ。島くんが神様の使いならね、なんで俺たちを使ったのかって。おかげで俺たちやこうやって生き延びてる。自分で言うのもなんだがね、俺たちやあ褒められたもんじゃねえだろ。

蘭 そうね。

佐久間 そうだよ。

蘭 いいじゃない。私は、めちやくちやになった街を見て、無言で死んでいく人を見て、ざまあみろって思ったね。……善人ヅラした奴ら。でも救われたのは私たち。ざまあみろよ。

佐久間 ——善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや。

蘭 誰の言葉？

佐久間 親鸞聖人だ。

蘭 意味は？

佐久間 ああ、自分を善人と思ってるインチキ野郎より、悪人の自覚がある俺たちのほ

うが、幾分マシってことだな。

蘭　ほんと？

佐久間　大体な。知らんけど。

蘭　知らんのかいな。……（万華鏡を取り出し）ちよつと一服。

蘭は楽な姿勢を取り、万華鏡をのぞく。佐久間はそれを見る。  
佐久間は万華鏡を取り上げる。蘭は気持ちよさそうに伸びる。

蘭　ん〜。

佐久間　分かった。東京を離れよう。俺たちや寄生虫だ。世の中が機能してねえところ  
にいても蜜は吸えねえ。

蘭　ほいさ。

佐久間　こんなご時世でも頑張っていきましょう。

蘭　そうよ。

佐久間　前向きに。

蘭　幸せが降ってきたんだから。

佐久間と蘭は荷物をまとめる。

佐久間　金よりも、食いもんがいっぱいあるとこに行こう。

蘭　南がいいわ、寒いのは嫌い。

佐久間　ちげえねえや。

佐久間と蘭は荷物を抱えて出ていく。

■ 16

2002年。夏。高知。金輪町。二階堂家の作業小屋。

農作業用だった小屋を集会所として使っている。テーブルや椅子があり、  
隕石と柱に関する資料などで溢れている。

輝夫と桜が出てきて、日常的な動きで集会所に転換する。ホワイトボード  
か壁に大きな日本地図を貼る。柱が落ちた場所にピンを打っていく。世界  
の状況を確認するための地球儀もある。

輝夫と桜は、町や高知市に理解を求めつつ、難民を受け入れる準備と、食  
料の増産を計画し、準備している。

四国では、松山市と高松市に柱が落ちている。

有馬と時枝、益子が金輪町にたどり着く。集会所に現れる。

桜は、望の搜索とレポートの拡散に有馬が消極的だったことを非難する。有馬は非を認め、謝る。輝夫が間に入り、収める。桜は納得しない。有馬は時枝と益子を紹介し、輝夫は彼らを協力者として受け入れ、握手する。皆それぞれ小屋で作業を始める。

時間経過。

2051年。

望と島、和夫と（神崎）、（山田聖子）は金輪町へ向かっている。

金輪町の町役場の、柱の資料室へ通される。そこにはかつての二階堂家の集会所にあったものが多く保存されている。

和夫に案内された望と島が、資料室を見る姿と、51年前の時間を共存させてみてもよいだろう。

■ 17

2002年。金輪町の集会所。

輝夫、桜、有馬、時枝、益子がいる。五人は目的を共有し、信頼感を深めつつある。非常時の緊張感を保ちつつも、フレンドリーな雰囲気。器に入ったお菓子などを皆で食べていてもいい。

有馬 四国で柱が落ちてるのは松山市と高松市。見た感じだと徳島市がそろそろやばい。

輝夫 となると、高知市も？

益子 こっから高知市街までって？

有馬 30キロくらい。見えないよ。

輝夫 落ちる基準は？

有馬 都市の中心、人の多いところだけど、プラス人口密度つてのが有力。政令指定都市は軒並みやられてるし、30万くらいの中核市もほとんど。

輝夫 高知市の人口って——

有馬 33万。

輝夫 おいおい。

有馬 ただ人口密度は低いんだ。徳島市は26万だけど、人口密度だと高知市を上回ってる。そのうえ今、本州から結構な数の難民がなだれ込んでるからね。大鳴門橋が人で埋まってたよ。市は規制してたけど、徳島市の人口密度は更に上がってる。

桜 なんで学習しないかな。

輝夫 市も分かかってんだろ？ 人が集まりすぎると柱が落ちるって。

有馬 もちろん分かかって規制してるんだけど、行き場の無い人はどうしても、大きな

街を目指してしまふよ。ここにたどり着くまで何度も見た。(地図を使って) 横浜方面からの流れだと、藤沢市に柱が落ちる。難民は平塚方面を目指す、平塚の人口が膨れ上がり、柱が落ちる。じゃあ次は小田原に逃げるとなって、結局小田原も。

時枝 柱に追っかけられてた。

有馬 リーダーがいくら分散しろと叫んでも、みんな不安だからね、どうしても大きなものに付いていきたがる。

輝夫 ……。

集まるな、と言っておる。

時枝 バベルの塔とおんなじ。

有馬 徳島市に落ちたら、難民は高知市に流れってくる。周辺の市町村に分散させないと、共倒れだ。

輝夫 かー、また説得回るか。

桜 高知市にも非難呼びかけないと。

輝夫 市でやれっつーんだよな。

有馬 しかし動かんもんだね。自分のところには落ちないと思ってる。

輝夫 完全に宗教団体扱いだからね。一年かけて結構な受け入れ体制も作ったのに、食料増産してさ。

有馬 やっぱチラシにノアの箱舟的なこと書いたのが。

輝夫 それ桜のせいだから。

桜 わかりやすいと思っただの。もう言わないで。

時枝は資料を広げている。

時枝 これは、都市の否定ですな。

有馬 連中は都市を、無傷で手に入れたんだよ。

時枝 手に入れてどうする。住むのか？

有馬 さあ。

時枝 いつまで経っても姿を見せんじゃないか。

有馬 駆除が終わってないからだろ。

時枝 駆除。とはいえ絶滅させる気はなさそうだが。

益子 でも人間にしか効果ないから明らかに狙い撃ちですよ。

時枝 まあ、お前らちよっと増えすぎだから、減らしますよってことかね。

益子 上から目線すねえ。

時枝 宇宙人ですから。

益子 (笑う)

時枝 連中は都市が欲しいんじゃない。私が思うに、観察してる。人の流れと人口密



度をずっと律儀に追っかけて、柱を落としてる。  
何かの実験？

有馬  
時枝  
輝夫  
それでも実験的だよ。明らかにデータを取って動いている。  
それで、実験の目的は？

時枝  
それは分からない。子供の頃、アリの巣を観察しなかったか？ 巣穴を塞いだり、水を入れたりして、蟻たちがどう行動するのか観察する。なぜそんなことをする？

輝夫  
面白いから。

時枝  
その通り。他には？

桜  
理解したいから、蟻を。

時枝  
そう。実際連中は、人間をよく勉強してる。柱が人間にしか効かないことから  
も明らかだ。面白い資料がある。(資料を指す)

益子  
時枝  
(資料を広げる) これは、柱を見ている人の脳の状態を画像にしたものです。  
活発に反応してる部分が赤くなっている。快楽中枢って聞いたことあるでしょ。

皆なんと無しに頷く。

益子  
この一連、ここが腹側被蓋野、ここが側坐核といっています。とても強く反応して  
ます。

時枝  
この回路はドーパミンの放出と関係してて、幸福感をもたらす。幸福感といっ  
ても様々で、美味しいものを食べた時、セックスの快楽、ゲームやスポーツでの  
勝利、仕事が上手くいった時や、誰かの役に立った時、幸せな時はすべてここ  
が反応してる。つまり、我々はこの幸福感を求めて、日々行動し、人生の目標  
を立てる。幸福感は頑張った自分への報酬だ。このシステムを脳の報酬系と言  
う。この報酬系に柱は入り込んでる。

益子  
報酬が、ドーパミンがダダ漏れって状態です。

時枝  
これは人間の脳に特別なものじゃなくて、有名な実験だとラットでも確認でき  
る。脳に電極を繋いだラットを籠に入れる。中にはレバーがあり、それを踏む  
と電極がラットの快楽中枢を刺激する。ラットはすぐにその関係を覚え、死ぬ  
までレバーを踏み続ける。

益子  
報酬系は本来、生存に必要なシステムなんですけどね。

時枝  
だが、こういうことにもなる。人間も動物ってことだな。

有馬  
お前らコレが気持ちいいんだろ？ ってことだ。

輝夫  
なめくさってんな。

時枝  
益子さん、あれ言っつてよ。

益子  
え、いいですよ。

時枝  
いや面白いと思うんだ。

益子 (注目を受け) その、思ったんですけれど、ひよっとしたらですよ、良かれと思  
つてやったのかもしれないって。

有馬 連中が？

益子 何かいいプレゼントを探してて、人間を隅々まで調べた結果、みんな幸せにな  
りたいんだ、と分かって、豪快に間違っちゃったみたい。実は侵略しよう  
してなくて、コミュニケーション取りたいだけという。

輝夫 (笑) 嫌がってんの早く気付けよ。

時枝 でも、ありえるよね。

有馬 まあ確かに。

時枝 宇宙人が侵略的というのは思い込みだ。

桜 そうだね。

有馬 これだけ殺しといてか。

時枝 蟻と思ってるんだよ。

益子 どちらから観察してるんですかねえ。(と上を見上げる)

有馬 そうだ、(と資料を探し) もう一つ、重要だと思うデータがあったんだ。ええ  
とね、これだ。(資料を持つ) 気象予報士の人が書いたものんだけど、柱が  
どこから来ているか。隕石とは違うことがはっきりと書かれている。  
だって形がもう。

輝夫 それにあんな、垂直に入ってこれないよな。

時枝 そうなんだよ。(地球儀を使って) 普通はこう、地球の重力に引かれながら、  
丸みに沿って、大気圏に入ってくる。

輝夫 隕石だったら大気圏でほとんど、燃えちゃうしな。

有馬 ちなみに、燃え尽きずに残った直径1メートルの隕石で、街が一つ消し飛ばそ  
うです。後には巨大クレーターが残る。でも直径30メートルの柱は燃えた形  
跡もなく、きれいに突き刺さってる。

輝夫 確かにクレーターにならないのが不思議だと思ってた。

有馬 あの柱、地上から40キロ辺りの成層圏で観測されてる。そこから地上に落ち  
るまでが90秒。これ、観測地点からの自由落下と、ほぼ同じだそう。つま  
り、柱は宇宙から来たんじゃないかって、地上から40キロ上空に突然現れて、そ  
こから落ちてただけってことらしい。

輝夫 そうなの？

有馬 観測結果だと、そうみたい。

益子 えー。なに突然現れるって。

時枝 それは何か、未知の技術で柱を転送してるのか？

有馬 そこには言及してない。面白いのはね、この人、そもそもこれは地球上の現象  
なのではないか、と。  
現象。

時枝

有馬 つまり、気象現象。大気中で結晶化した何か。

時枝 雪や、雹みたいに？

有馬 気象予報士だからこの人。

時枝 面白い。面白いねその人。へえ。

輝夫 そのうち天気予報に柱が加わるよ。曇のち柱。

有馬 (笑) でも不思議だよ。観測する限りはそうなんだから。

時枝 面白いね。

桜 ……。これやつぱり、宇宙人じゃないよ。

時枝 え？

桜 だって天気みたいなんなんですよ。

有馬 ああ。

桜 その人が言うように、もし柱が地球上の現象ならね、なんでそんなことが起き

るのかってこと。例えば、地球をひとつの生き物と考えると、人間の環境破壊

っていう病気に対する、免疫反応みたいなもんだよ。

時枝 確かにそういうアナロジーは可能だ。

桜 だって柱をメッセージとして受け取ると、言いたいことは簡単じゃない？

時枝 集まるな。都市の否定。

桜 人間増えすぎ。さつき益子ちゃんが言った通りだよ。コミュニケーション。言

ってるの誰？ 地球だよ。

時枝 (否定はしないが、抵抗も感じて苦笑い) はは……。

有馬 え、それって、地球に意思があるってこと？

桜 その意思を私たちは、神様と呼んでる。

有馬 出たよ。(呆れる)

桜 宇宙人だって充分バカバカしいよ。

有馬 地球の意思も相当だよ。

桜 地球の意思も神様も、一人の、こう人間みたいなのを想像しないで。違うから。

それはもつと、大きな、仕組みのようなものなの。体の免疫反応は意思でやつ

てるわけじゃないでしょ。体の仕組みだよ。私たちの体は理解できないほど

複雑で、奇跡的に調和してる。地球の環境だってそうだし、宇宙の物理法則だ

って同じ。世界そのものが存在することの奇跡を、私は神様と呼んでる。もし

宇宙人が存在したとしても、それだって神様の一部。

有馬 ……世界、そのものね。

時枝 その世界に攻撃される人間ってのは、どうなんだ？

輝夫 ま、どう応えるかでしょ。これから。

電話が鳴る。有馬が取る。

有馬  
（電話）はいはい。……分かりました。（電話を切る）徳島市に柱が落ちた。  
結構早かったな。

皆、それぞれ動き出す。

■ 18

金輪町。一ヶ月後。集会所。  
輝夫と桜がいる。佐久間と蘭が入ってくる。

桜 お待ち下さいっていいましたよね。

佐久間 すいませんせつかちで。代表の方ですか？

輝夫 山田です。

佐久間 どうも、佐久間です。

輝夫 ご用件は？

佐久間 受け入れを。

輝夫 ですよ。あれは、何人いますか？

佐久間 300だな。

輝夫 今ちよつと難しいですね。

佐久間 あそう。

輝夫 先週受け入れたばかりで。

佐久間 参ったな。

輝夫 どちらから？

佐久間 高知市の避難所がいっぱいだね。

輝夫 ああ。

佐久間 駄目？

輝夫 すいません。

佐久間 みんな限界なんだよ。畑を荒らすかもしれんが勘弁してくれ。先に謝っとく。

桜 どうにかしてください。リーダーでしょ。

佐久間 リーダーってわけじゃねえよ。

桜 じゃあなんでここにいるんですか。

佐久間 俺は自分のために動いてるだけ。後は金魚の糞だ。

桜 無責任ですよ。

輝夫 お願いしますよ。食料なら多少の援助はできますから。

蘭 （外の景色を見て）すごいですね、このご時世に。こんなに整然とした畑と避難所を初めて見ました。

輝夫 どうも。

蘭 これ、自給自足できる感じなんですか？

輝夫 できるように設計したつもりです。

佐久間 はー、大したもんだ。

蘭 ねえ。まるでこうなることが分かっていたみたい。

桜 ……。

蘭 私たち、レポート読んだのよ。

桜 え？

蘭 あなた達のレポート。隕石のね。だから柱が降ってきた時、何が始まったかすぐに分かった。おかげで命拾いしたわ。

桜 そうなんですか？

輝夫 はは、ははは、無駄じゃなかったな。

桜と輝夫は顔を見合わせる。

蘭 隕石がこの町に落ちたのも、きっと神様の思し召し。

佐久間 はは。

蘭 何笑ってんのよ。

佐久間 いやその通りだと思っつてな。

蘭 この先、どうなっていくと思います？

輝夫 分かりませんよ。

蘭 私たち役にたちますよ。レポートに賛同したんです。

輝夫 ……。

佐久間 連れてきた300は、ほとんどが二十代から三十代、頭のいい連中だ。元氣もあるから力仕事もできる。

蘭 どうかしら。

桜 受け入れたいけど、限界なんです。

佐久間 高知市な、あの感じだといずれ柱が落ちる。難民がなだれ込むぞ。警備が必要になるな。どうだ。ウチの300は強えぞ、スパルタだから。(笑)

桜 警備は、必要ありません。

佐久間 いやいやいや。他からしたらここは楽園だよ。来るって。

蘭 危ないね。

輝夫 んー、とはいえなあ。

蘭 実際、盗賊団みたいなのがが増えてるからね。

佐久間 ああ結構見たな。

蘭 みんな生きるのに必死よ。

佐久間 そうだな。……これはまあ今後のことを考えて言うけど、見た感じ、ここも年寄りが多いな。もともと住んでる人かね。その、これは他の避難所になつてる集落で見たことだが、老人を追い出すつても一つのやり方だ。

桜 なに言ってるんですか？

佐久間 いやシビアな話だよ。そこじゃ動けない老人は柱の前に突き出された。残酷に見えるかもしれないが、違う。姥捨て山とは全然違う。あの柱は最も幸福な、安楽死を与えてくれる。

輝夫・桜 ……。

佐久間 俺はね、よく出来てると思うんだよ。あの柱によって生まれた問題は、あの柱によって解決できる。いくら絶望しても、柱がある。柱は俺たちを苦しめるが、最後に救ってくれる神様でもあるんだ。

桜 やめてください。

佐久間 75歳以上を集めて志願者を募れ、半分は同意するよ。

桜 やめて。

佐久間 現実見ろよ。

桜 この人を追い出して。

佐久間 分かるよね、あんたは。

輝夫 分からないす。すいません。

蘭 (笑) 怒らないでよ。例えばの話よ。

輝夫 お引取りください。

佐久間 参ったねえ。

蘭 せっかくここまで来たのにねえ。

輝夫 すいませんけど。

輝夫は退室をうながすが、佐久間と蘭はふてぶてしく居座る。

輝夫 山の、古い遍路道通ってきたでしょ。

佐久間 ええ。

輝夫 よく知ってますね。

佐久間 昔来たことあるんでね。

輝夫 へえ……

輝夫はふと佐久間をラッパ屋と直観する。

輝夫 ちょっと待って。(輝夫は佐久間をまじまじと見る)……ひよつとしてあんた、ラッパ屋か？

佐久間 ……いや。なんだそれ？

輝夫 ラッパ屋だあ。ラッパ屋なんだろう？ 去年の春、この町に来た。そうだろう？

佐久間 いや——

輝夫 あんたそんな時、藤枝次郎つてのに会ってねえか？ 山でさ。

佐久間 知らねえな。

輝夫は興奮し、佐久間に詰め寄る。

輝夫 知ってんだろ？ あんたこの町に隕石を拾いに来たはずだ、しらばっくれんなよ。全部分かっててここに来たんだ、何しに来た？ え？ ラツパ屋なんだから。教えろよ、望はどこだ？ 知ってるよな？ お前知ってること全部言えよ！  
佐久間 知らねえよ！

佐久間は輝夫を突き放す。

佐久間 わけ分かんねえこと言ってるんじゃないよ。俺は何も知らねえ。

外で何かが衝突するような音がする。

蘭 何？ 今の音。……柱じゃないよね？

佐久間 違う、すぐ外だ。

輝夫 なあ、ラツパ屋なんだろう？

佐久間 違うって言ってるんだろ。しつげえな。

輝夫は脱力する。

益子が入ってくる。

桜 どうしたの？ さっきの音はなに？

益子 おお落ちてきた。空から。

輝夫 何が？

益子 人。

皆、話を飲み込めない。

佐久間 ぐちゃぐちゃ？

益子 いやあそれが……（どう答えていいか分からず首をかしげ、外へ戻る）

桜 えどういうこと？

望が入ってくる。失踪した時と同じ姿。体のバランスが取れないように、不安定な歩き方、動き方で入ってくる。  
有馬と時枝が、恐る恐る付きそう。空からものすごいスピードで落下して

きて、無傷で立ち上がったことの不思議から、動揺している。  
桜と輝夫は驚きで声も出ない。佐久間と蘭は見守る。

輝夫 おおお、おおおお。

桜 望？ 望なんだよね？

輝夫 望。はは、帰ってきた。帰ってきた。

桜は望を抱きしめる。

望 あえ、うあー。(曖昧な母音。言葉が操れない)

望は桜の腕を振り払う。望は反動で尻もちをつく。

桜 どうしたの？

望はゆっくりと立ち上がる。皆を見回す、桜と輝夫に何か言いたそうな素振りを見せるが、言葉にならない。

望 えあ、ああ、ういるるる、ああおおお……

桜 望？

輝夫 望。どうした、大丈夫か？

望 あええええ(笑っているようにも見える)

輝夫 落ち着け、望。落ち着け。(ゆっくりと近づく)

近づいてくる輝夫に、望の体が緊張するのが分かる。

輝夫 大丈夫、大丈夫だからな。

輝夫が望に触れると、混乱したように叫ぶ。輝夫は驚いて手を離す。

望はよろめくように歩き、テーブルの上の物をいくつか落とす。手にとつた何かを興味深く見る。望は正気を失ったように見える。

桜と輝夫は、望の変貌に恐怖と動揺を隠せない。

望の意味不明な発言は、セリフ通りでなくても構わない。望は何かを伝えたいという強い思いがあるが、言葉を(身体そのものを)うまく操れない状態で、そのことに苦しんでいる。その望の状況が伝われば良く、セリフは厳密ではない。



輝夫 嘘だろお……

桜 ……（涙を拭う）

佐久間 （笑い）完全にバグってやがんな。まこのご時世、珍しいもんじゃねえや。

佐久間と蘭は立ち去る。望は混乱し、暴れ、獣のように叫ぶ。

望 ぐあああああ！

桜 望！ お兄ちゃん！（望は声を止め、桜を見る）しっかりして。

望はゆっくりと桜に近づく。桜は逃げない。

望は右手で、桜の頬と口を驚掴みにする。望は口を開け、喉元に力を入れる。望の口から、桜の口に何かが入り込んでいく。

思わず見てしまっていた輝夫は桜の危険を感じ、二人を離す。

有馬と時枝は望を取り押さえる。望は二人を振り払い、にらむ。すると二人は柱を見た時と同じ状態になる。輝夫も望を見ると同じように意識を奪われる。桜は、息を吹き返すように咳き込み始める。何かが入り込んだ違和感を喉に感じる。

桜 何をしたの？

桜は皆が幸福に支配れていることに気付く。

桜 これ、望が？

いうう……

桜は苦しそうに何を訴えようとする望を必死に理解しようとする。

（自分を指し）サクラ。（望を指し）ノゾム。

……？

（自分を指し）サクラ！（望を指し）ノゾム！

（自分を指し）サウラ。

ううん。（望の手を取り、桜に向けさせ）サクラ。

（桜を指し）サウラ。

（指を望に向けさせ）ノゾム。

（自分を指し）オゾム。（桜を指し）サウラ。

そう。私たちは、家族。だから、大丈夫。

桜は望を優しく抱きしめる。望は桜の腕の中で脱力し、そのまま意識を失う。その瞬間、目を奪われていた皆は開放される。

輝夫 あれ？ どうなった？

桜 大丈夫。落ち着いたよ。寝てる。(笑)

輝夫 は、はは……(近づいて望の顔を見る)

桜 子供みたい。

望は桜の膝で眠る。皆で望を見ている。

有馬 大丈夫？

桜 うん。大丈夫。

有馬 ……。行くよ。何かあったら呼んで。

輝夫 うん。

有馬と時枝は部屋を出る。桜と望、輝夫の三人だけになる。

輝夫 帰ってきた。

桜 うん。帰ってきた。

輝夫 (ほっとして笑いがこみ上げてくる) 半端ねえな、帰ってき方が。空から降って来るって、くくく(笑)。

桜 (笑) ほんとだよね。

二人は笑う。

桜 はあ。信じられないようなことばかり。

輝夫 ほんとだな。でも、こうやって今、また三人でいるってことが、一番の奇跡だよ。

桜 うん。

輝夫 俺、金輪町出るわ。

桜 ……。

輝夫 ここはもう大丈夫だろ。自給自足の村を他にも作る。土地は余ってるし、やり方は分かったしな。あのおっさんの300人を連れてくよ。……いや俺思ったんだ、こうやって基礎作ってやり方教えて、軌道に乗ったら後は住民にまかせて、俺たちは次へ。そうやって新しい自給自足の村を作っていくんだよ。どう？ 農家最強だね。

輝夫 だろ。……あの、付いてきてくれますか？

桜 ……当たり前じゃん。  
輝夫 はは、ははは、良かった。

望は目を覚まし、桜から離れ、2051年の存在に変わる。桜と輝夫は望の動きには反応しない。望は未来から二人を見る。後ろから島と和夫、神崎も出てくる。

■ 19

2051年。金輪町。2002年の輝夫と桜もいる。

望 (和夫に) きみのお祖父さんは、沢山の人を救った。

輝夫は桜の手を取る。二人は手をつないで部屋を出ていく。

和夫 お祖母ちゃんに、何をしたの？

望 うん、言葉にするのが難しいんだけど、変化を、促したんだ。

和夫 変化。  
望 その結果が、きみだよ。

和夫と神崎は顔を見合わせる。

聖子が入ってくる。

聖子 あ、どうも。あの、今日の午後1時に、公民館のホールということになりました。ほとんどの住民が集まる予定です。

島 ありがとうございます。

望 きみたちは新しい世界を作る。

和夫 みんなと一緒に暮らすことは出来ないの？

聖子は和夫を抱きしめる。

聖子 一緒に暮らしたい。離れたくない。でもね、あなたが生まれたのはメッセージなの。お祖母ちゃんがずっと言っていた、答えを間違えないようにって。町長たちは、柱以前の旧世界をもう一度作り直そうとしている。あなたたちを使って。それは間違い。

大道寺が来る。

大道寺 なんですかこれは。あんなお触れを出して。いくら山田家でも傲慢が過ぎるって、町長がご立腹ですよ。坊っちゃんをどうする気なんですか？

聖子 あなたには関係のないことです。

大道寺 はあ？（和夫に近寄り）さあ坊っちゃん、一緒に行きましょう。

和夫 ……

大道寺 町長がお待ちです。奥様はちよつとおかしい。

大道寺は和夫の手を取る。

大道寺 さあ。

和夫は大道寺の手を払う。

大道寺が苛立ちを顔にすると、島が近寄り、肩に手を置く。

大道寺はその手を払う。

大道寺 なんなんだ、あんたらは。

島 帰りなさい。あなたたちの役割は終わったんです。

大道寺は去る。

時間経過し、ホールに人が集まってきて、ざわついてくる。

聖子と和夫、神崎はステージに立っている。島は客席を見回す。

島 だいぶ集まってきたな。

望 そうだね。

島 そろそろいいかな。（客席に向かって手を挙げ）皆さん。（会場は静かになる）お集まりいただきありがとうございます。今日は、とても、大切なお話があります。

島は望に目配せする。

望が前に出る。望は一度和夫に視線を送り、客席に礼をする。

望 こんにちは。では、始めましょうか。

客席は望に注目して静まりかえる。暗転。

——了